

第3章 伊場大溝の調査成果

1 伊場大溝の層位

(1) 伊場大溝の堆積状況 (Fig. 67)

伊場大溝の埋土については、伊場遺跡の発掘調査時に各層位に付与された名称がその後の調査でも継続的に用いられている。今回の調査においても、それに従っているが、大溝の堆積状況は調査地点によって若干異なっており、細部は必ずしも一致するものではない。今回の調査で用いた土層には本調査独自のものが一部あり、過去の大溝の調査とは一致しない部分がある。今回の調査では、大溝の主軸にはほぼ直交する3本のトレーナーで土層の堆積状況を確認した。大溝の北西から順にTr-1、Tr-2、Tr-3と称した。Tr-1とTr-2の距離は約27.7 m、Tr-2とTr-3の距離は約20.5 mの距離である。伊場大溝の層位をVII層、VII層、V層、IV層、IV、III層の6層に識別した。今回の調査でも明確にVI層は確認できていない。VI層は伊場遺跡の調査においてVII層とV層の間に挟まれた薄い砂層とされ、VII層とV層を分割する鍵層とされている。これまでの梶子遺跡9・13・21次調査や鳥居松遺跡5次調査において検出した大溝でもVI層は確認できておらず、伊場遺跡内において部分的に堆積した層位と考えられる。また、大溝最下層とされるIX層については、今回の調査では確認できなかった。

VII層～VIII層は伊場大溝のTr-1、Tr-2の両岸とTr-3の南岸で確認した古墳時代中期後葉（5世紀後葉）から古墳時代後期前半（6世紀前葉）の堆積層である。灰色系、褐色系、黒色系のシルト層を主体として、腐植物を多く含む地層と交互（ラミナ状）に堆積している。Tr-1、Tr-2では北岸で明確にオーバーハングする。土層図に示すとおりVII層の堆積は、VII層の大溝によって大きく削り取られている。Tr-3の北岸では、VII層は確認できなかった。VII層の完掘時点での大溝の最大幅はTr-1で19.4 mであるが、最小幅のTr-2では約16.0 mである。ほとんど蛇行ではなく直線的であるが北西端でごくわずかに北へ湾曲する。特筆すべきは、南岸北西端においてVII層以前の枝溝（SD315）、VII層の枝溝（SD314）を確認している。SD315は緩やかに北へ湾曲しながら西へ延びると推定される。SD314は北岸南東部に北東へ延びるVII層の枝溝と考えられる。これらの溝は平面的には非常に認識し難く、その延長線上の既往調査では確認されていない。VII層の最下層からは3世紀代から4世紀代の遺物も出土するが、いずれも数は少なく小片が多いことから、大溝形成以前の遺物が混入したものと考えられる。

VII層～VIII層は、灰色系、褐色系シルトと灰色砂が交互に堆積した層であり、この層が大溝の主たる底面の堆積となる。VII層の堆積後、若干の流路の更新があったと考えられ、大溝の南岸はTr-3の土層断面でVII層の時点から約2.1 m東へ移動している。VII層の埋土には砂が比較的多く含まれ、部分的に層をなしていることから、かなりの水量があったことが推定される。溝はほぼ直線的である。伊場遺跡の調査において確認したVI層は、過去の調査と同様に確認できなかったことから、VII層の最上層に堆積した砂層の一つと考えられる。大溝底面（VII層下面）は、部分的に大きく抉られており、かなり凹凸があったと考えられる。既存調査ではあまり類例がないVII層において貝塚（SS13、

1 伊場大溝の層位

SS14) が形成されている。VII層中には古墳時代後期後半(6世紀後半)から飛鳥時代(7世紀)の遺物を多数内包する。特に最下層には、部分的ではあるが土器が大溝の底部に貼り付くような状態で大量に出土した。特に密度が高かったのが、窪み状の周辺であった。鳥居松遺跡5次調査では、VII層中で流路の更新(VIIb層とVIIa層)があったことを確認している。今回の調査では、現地調査時には平面的に加えて、土層断面でも認識できなかったが、遺物の出土位置からVII層中において、部分的に流路の更新があったとも考えられる。

V層 V層は、有機物を含む褐色、灰色系シルトの堆積であり、有機物を含むのが顕著である。土器、木製品、貝、獸骨など多くの遺物を内包する。奈良時代前半(8世紀前葉から中葉)に堆積した層である。V層中には様々な規模の貝塚(SS03、SS08～SS11)が形成されている。遺物や貝塚は南岸に集中する傾向がある。V層時点から大溝は急激に幅を狭め、浅くなっていく。V層では溝は、ほぼ直線的であるが南東隅で微妙に南へ内彎気味になる。

IV層 IV層は有機質の多い褐色系、灰色系シルトの堆積で、奈良時代後葉(8世紀後葉)から平安時代前葉(10世紀前葉)にかけて堆積が進んだ層である。V層と比較してさらに浅くなり、この頃にはほとんど流れがない川になり、徐々に湿地化が進んでいったと考えられる。大溝の南岸では、奈良時代後葉の貝塚(SS01、SS02、SS04～SS06)が形成されていたほか、南岸北西部では、平安時代前葉(9世紀後半)の木簡、墨書き土器を多数含む、大量の遺物を集積した造構(SX01)を検出した。IV層でも溝は、ほぼ直線的であるが南東隅で微妙に南へ内彎気味になる。

III層 III層は、黒色を帯びた未分解の植物片など有機物を大量に含む褐色系粘質土層である。梶子遺跡13次調査においては、灰色系のIIIa層、褐色系のIIIb層と分離されているが、今回の調査では、明確に認識、区別できなかった。また、木簡を含む古代の遺物がほとんどを占め、上下の層位の時期から平安時代中葉(10世紀中葉～11世紀)に比定される。この層の堆積時期の下限を直接的に示す遺物が出土しておらず、時期の判定が困難である。この時点における大溝は、かろうじて溝の形状を保っているが、ほぼ埋没し植物が大量に繁茂する湿地のような状態になっていたと推定される。伊場遺跡群の低地の大部分が湿地化していたと考えられる。遺物量は少ないが、山茶碗や山皿、内耳鉢など中世の遺物を含む。堆積年代は遺物の時期から平安時代後葉から鎌倉時代(12世紀～13世紀)を中心に堆積したと推定される。

II層 II層は、既往調査では、大溝の埋土上に堆積した緑灰色粘土層で、現代の盛土施工以前に耕作されていた、水田耕作土層とされている。



Fig. 66 大溝トレーンチ2 土層堆積状況

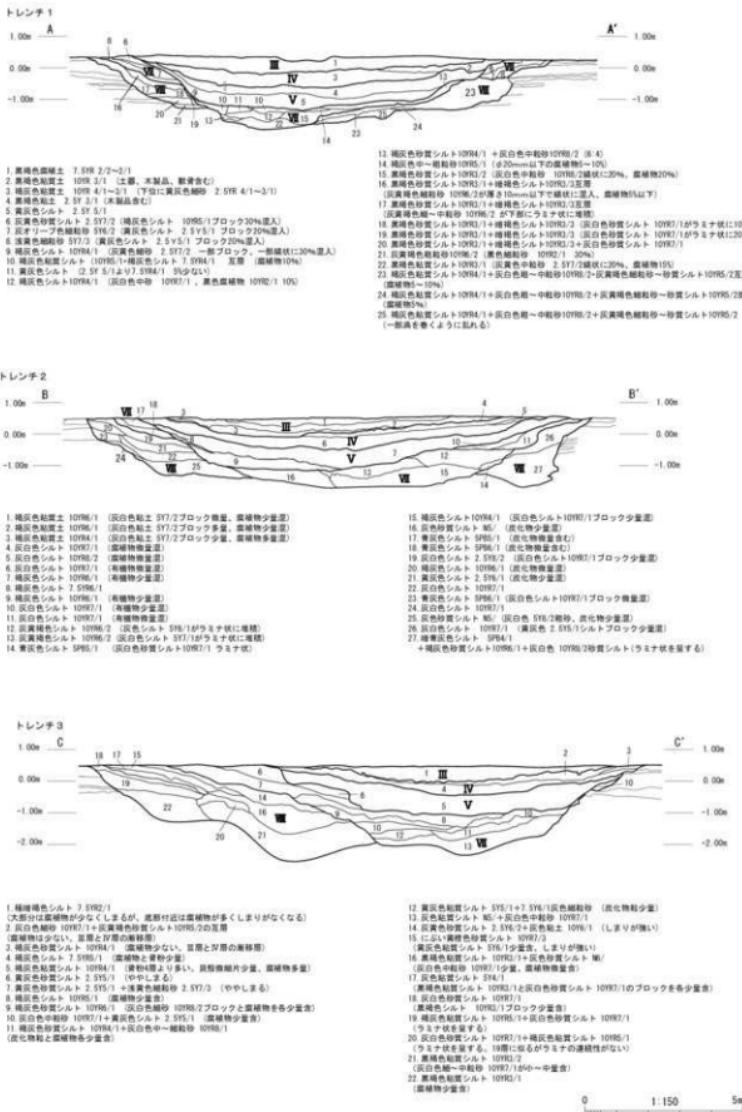


Fig. 67 伊場大溝土壌断面図

2 伊場大溝形成以前の遺構と遺物

(1) 概要

伊場大溝形成以前の溝と考えられる溝を検出した。SD315 の東岸には護岸施設を有し、Ⅶ層に合流あるいはⅧ層に切られ、淘汰されてしまったと考えられる。

伊場大溝の下層であるⅥ層やⅦ層を中心には古墳時代前期の遺物が出土している。これらの遺物は大溝の形成に伴う激流により混入した遺物の可能性が高い。

(2) 溝跡 (SD315)

BE53・54～BF53・54 グリッド、トレンチ 1 の南西端の南側に位置する。検出長 11.7 m、最大幅 8.7 m を測り、南に弯曲しながら西方へ調査区外に延びる。出土遺物などからⅦ層以前に相当する。SD315 の南岸には護岸と考えられる構造物を検出しており、特に合流部は頑丈に構築されている。これは北西または西方から屈曲する際、南岸が水衝部となり、浸食を回避するために考えられる。

(3) 出土遺物

SD315 土器 1 点、構造物の部材 2 点を図示した。1 は、SD315 から出土した壺体部。体部は球形を呈しており、外面をミガキ調整している。2・3 は護岸材である。2 は加工板。比較的丁寧に加工されており、転用されたものと考えられる。護岸の横板に使用されていた。3 は杭材。頂部は折れたか腐食しており本来の長さは不明である。先端のみを加工している。横板の固定に穿たれていた。

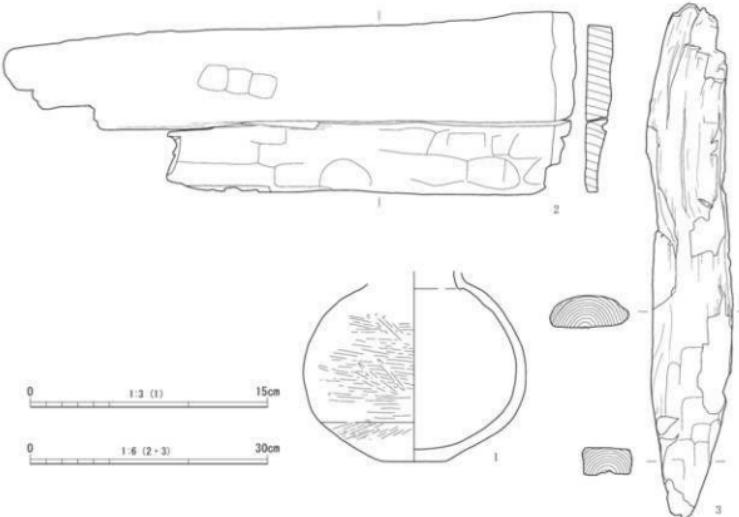


Fig. 68 SD315 出土遺物

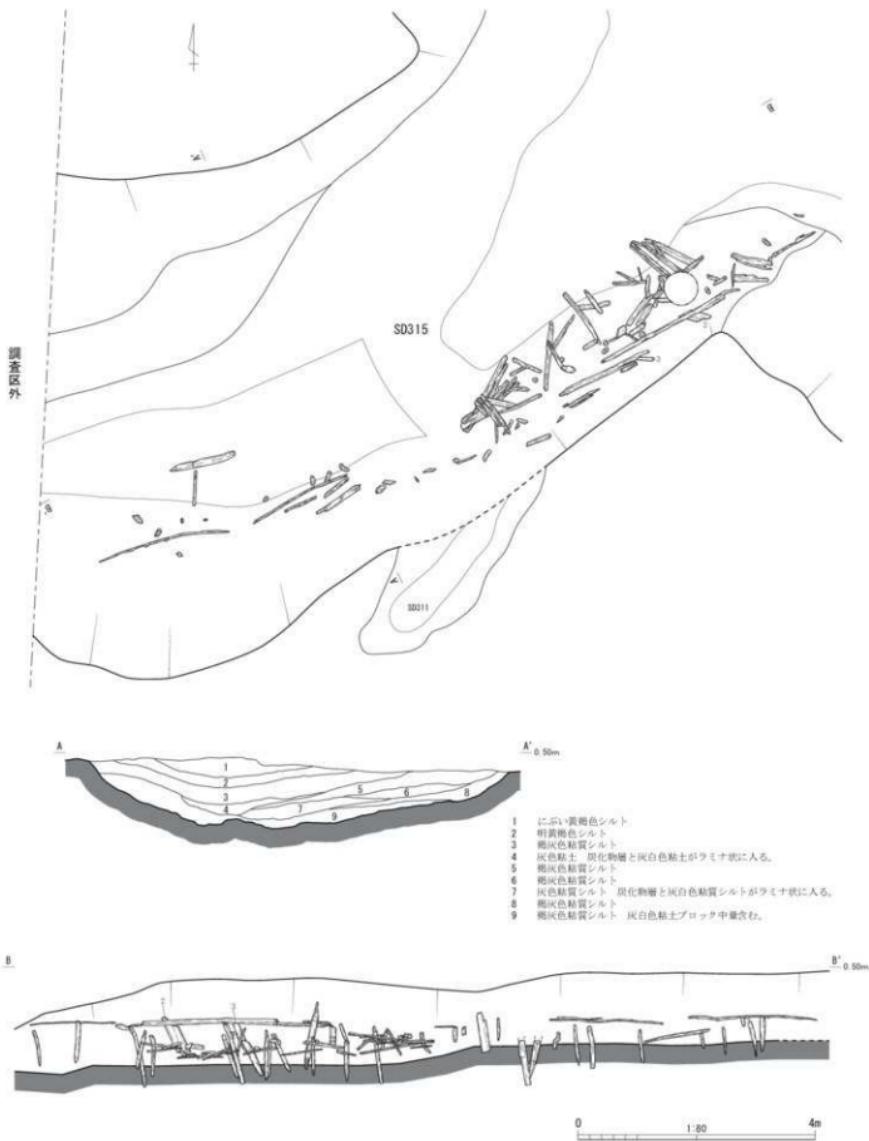


Fig. 69 SD315 実測図

大溝形成以前の遺物 VII層、VIII層中から出土している。出土状況に傾向は窺えず散在的に出土しているが、各層の下位での出土が多い。また、多くは摩耗しており、数は少ない。7点を図示した。

弥生土器 1～4は弥生土器である。1は複合口縁の壺である。口縁部の内外に羽状の刺突が施されている。2は折返口縁壺。口縁端部上面に波状文が認められる。3・4は器台で口縁部は湾曲して端部に面を有する。4は2段に3方向計6箇所の円形のスカシ孔を有する。これらは弥生時代後期の山名式、廻間式に相当すると考えられる。

古式土師器 5～7は所謂、古式土師器。5の高坏は脚部の3方向に円形のスカシ孔を有し中空である。坏部の屈折が明瞭である。6は外面と坏部内面にミガキ調整を施す。7は所謂S字口縁壺の脚台部。端部を内側に折り返す。

(4) 小結

SD315は、護岸の杭材(3)をAMS(C14)年代測定した結果、39calBC～80calAD(95.4%)の値を得ており、弥生時代中期後葉に比定される。樹木の伐採から製材、利用、廃棄までの時間差を勘案しても古墳時代初頭の範疇は外れないと考えられる。伊場大溝の形成時期を古墳時代中期とするならば、合流することは考え難い。大溝(SD01)VII層以前の別溝の存在の可能性を考えるか、大溝(SD01)の初現を弥生時代後期～古墳時代前期まで遡らせなければならないことになる。大溝(SD01)の初現と形成時期は今後の検討課題である。

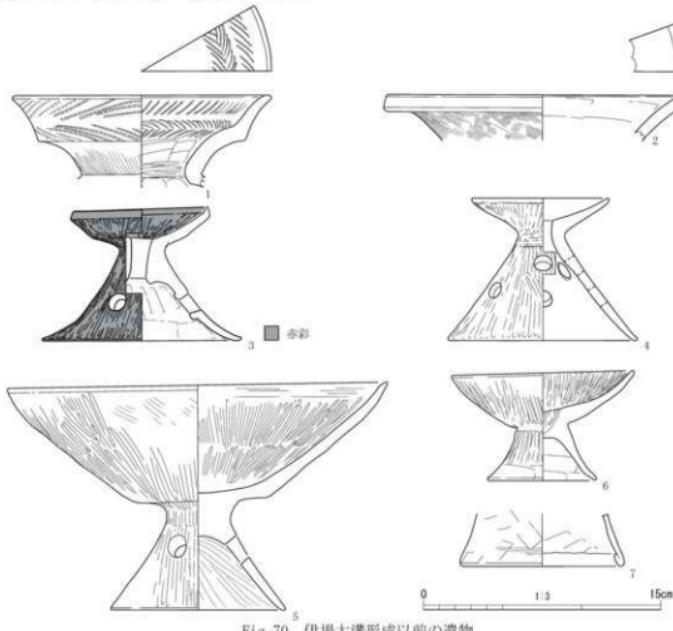


Fig. 70 伊場大溝形成以前の遺物

3 伊場大溝VII層の調査

(1) 概要

VII層は、伊場大溝の最下層の層位で、灰色系、黄色系、褐色系、黒色系シルト層主体に、未分解の植物片を含む層や砂質シルト層が交互に堆積するラミナ状、クロス状、渦巻き状の堆積が特徴的である。最深部は基盤砂層に到達しており、下層に行くほど砂質が強い土が堆積していた。VII層の堆積は北西端のTr-1、中央のTr-2では両側に堆積するが、南東端のTr-3では南岸のみに遺存しており、北側はVII層以降の流路によって削り取られたと考えられる。また、土層断面の観察結果から、流れの緩急や堆積途上での流路の更新があったとも考えられる。古墳時代中期後葉の遺物を主体的に包含するが、弥生時代、古墳時代前期の遺物も少量出土した。大溝東岸南東部に北東方向に延びる枝溝SD314を検出している。

(2) 伊場大溝の形状

VII層の大溝は、完掘時点での幅約14.7～17.7mと南東部の方が幅広となる。最深部の標高は-2.5mであった。しかしながら、底面は全体的にVII層以降の流路によって大きく浸食を受けており、5箇所の大きな窪みとなっている。溝幅以外は、本来のVII層の大溝の規模と形状ではない可能性がある。大溝の底部には幅約1.5～6.3m、深さ約0.7mの川底溝が形成されている。川底溝が形成されていることや、下層に細砂が多く堆積していることから、この時点では豊富な水量があり流れも比較的速かったと推定される。北西端の北岸の様相が不明瞭であるが、北西方から南東方向に向かって直線的に流下していたと考えられる。北岸が川の攻撃面に当たると考えられ、オーバーハングしている箇所も多く確認した。水流により北岸が削られ、流路が南側に湾曲したと推定される。

(3) 遺物の出土状態

VII層の出土遺物は、他の層位と比較して量が少なかったものの、5世紀後葉を中心とする時期の土器や木製品などが得られた。VII層の遺物の出土状況は、上層や中層からの出土は点在するものの皆無に等しく、下層や川底溝から集中的に出土する傾向にあった。後述するVII層には、5世紀代に遡る遺物が多数含まれている。流路の更新過程でVII層中に埋没していた遺物が水流によって掘り起こされ、VII層中に再堆積したものが存在すると考えられる。

(4) 溝跡

SD314 (Fig. 71) VII層から検出した枝溝である。伊場大溝VII層に切られるがVII層との関係は不明である。SD314は大溝北東岸の南西側に位置し、幅8.03m、検出面からの深さ1.30mを測る。埋土は8層に分層でき、レンズ状に堆積する。大溝に対しほぼ直角に接続することから、合流する溝であると考えられる。北東方向に延びると推定するが既往調査ではこれまで検出されていない。大溝との合流部には径40～60cm、長さは最大200cm程の自然木が数点出土した。これらは人力では持ち上げられない重量であり、かなりの水量と激しい水流が容易に推察される。検出したSD314の

3 伊場大溝Ⅷ層の調査

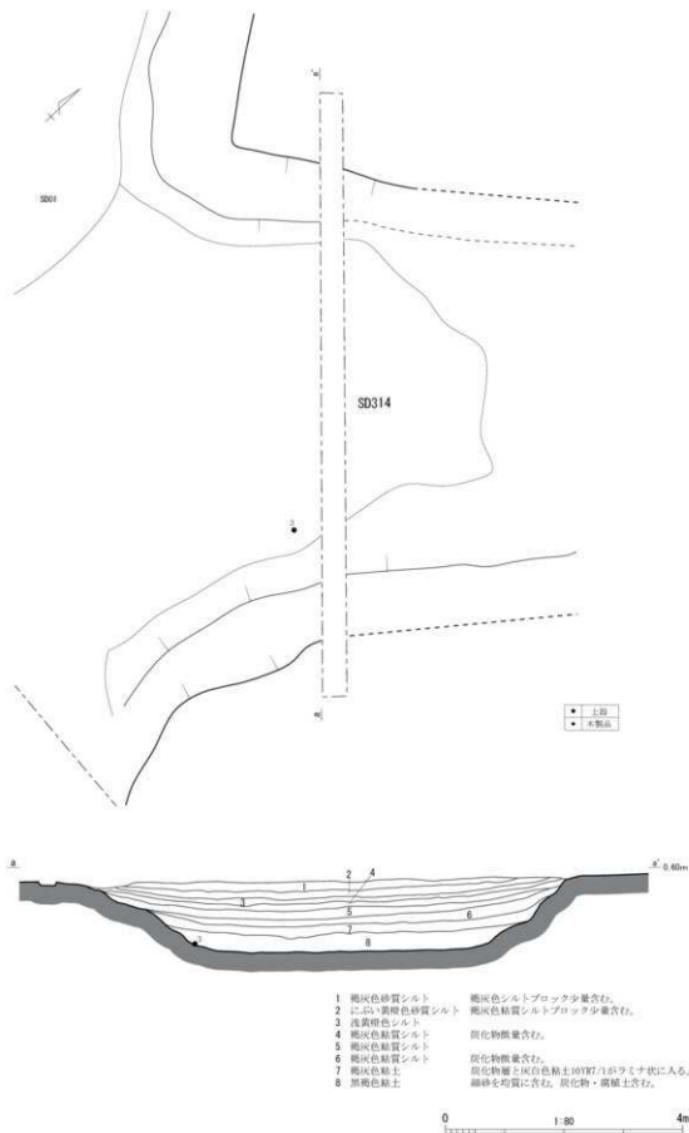


Fig. 71 SD314 実測図

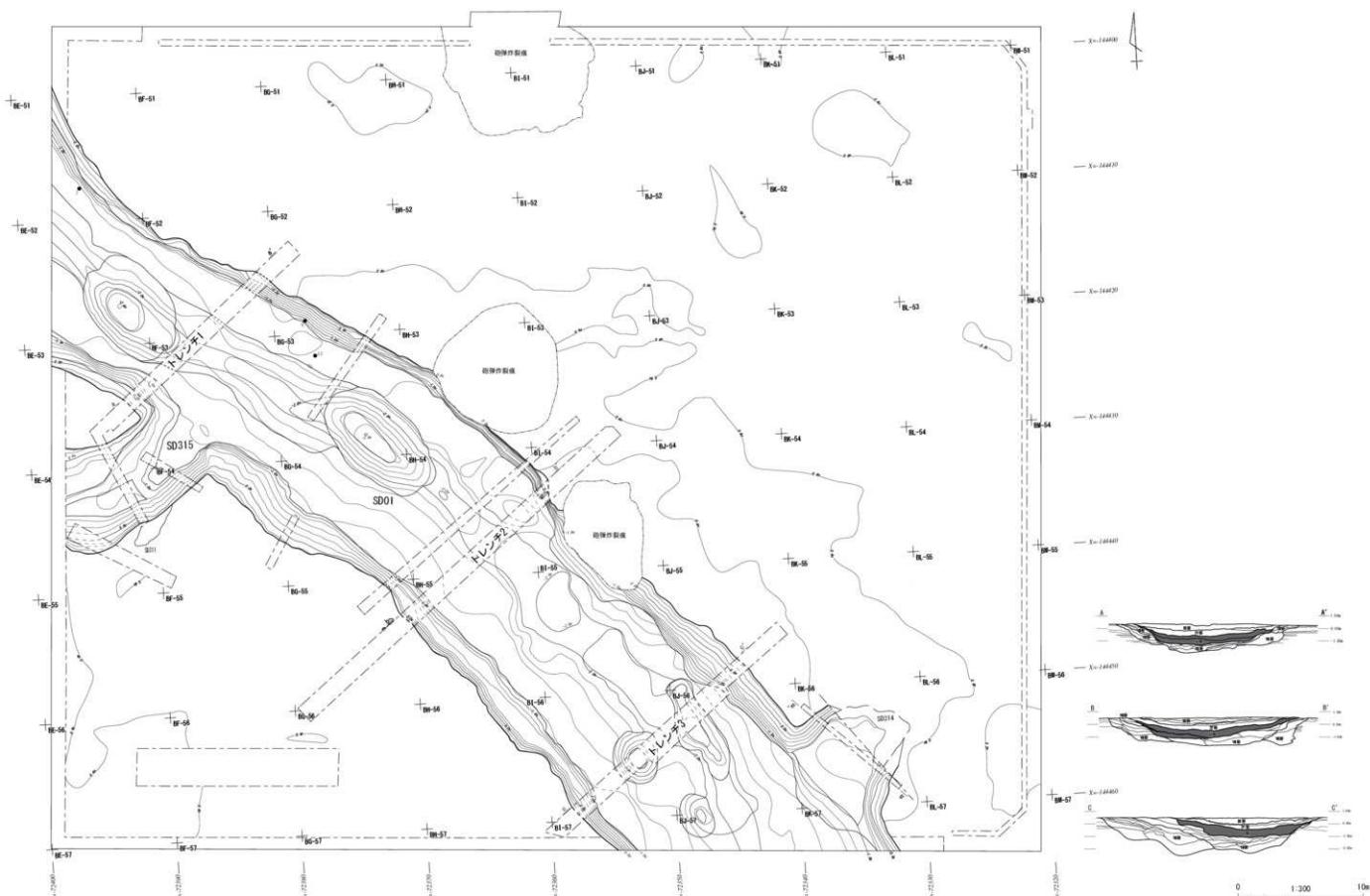


Fig. 72 D区 伊場大溝VII層

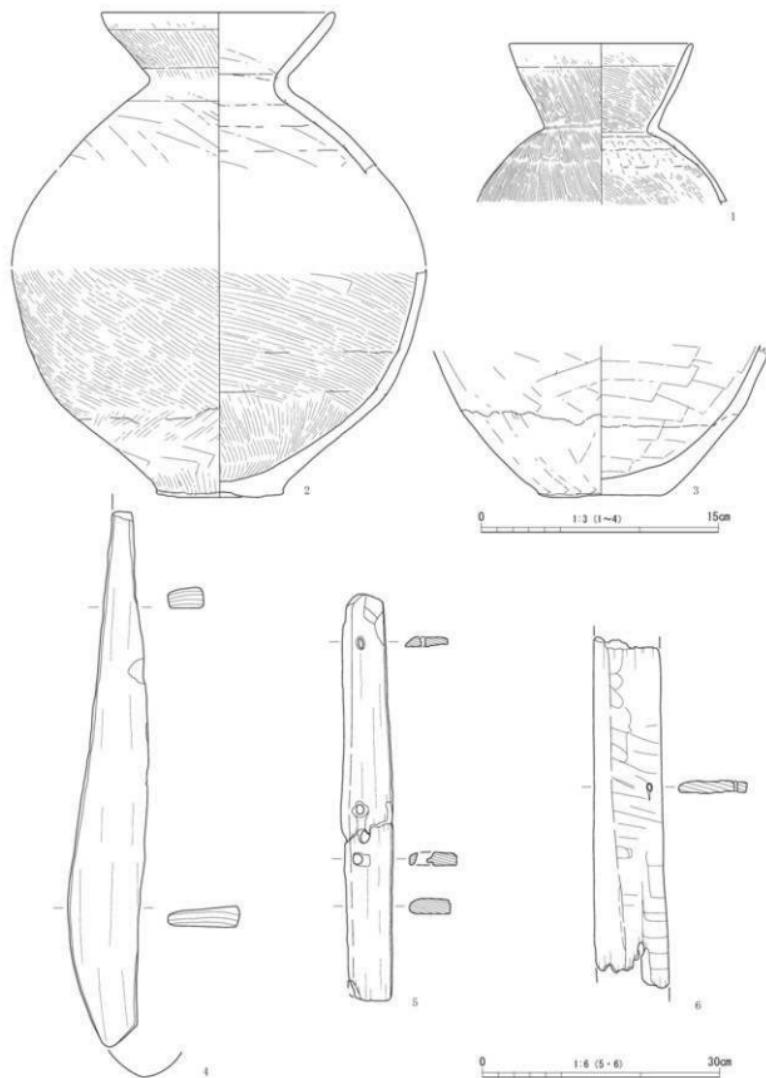


Fig. 73 SD314 出土遺物

3 伊場大溝Ⅷ層の調査

底部は接続する大溝底面から約6m北東側へ延びる。底面の標高は大溝の底面標高とほぼ一致する。遺物は底面付近から土器、木製品が出土したが細片のため図示していない。底面直上の加工材をAMS年代測定した結果、316calAD - 398calAD (70.5%) の値が得られており、それに従えば古墳時代前期～中期に相応することになり、土器の時期と大枠で一致する。大溝Ⅷ層の形成時期の概念からすれば、SD314はⅧ層以前の所産となる。しかし、前述のとおり、巨大な自然木はSD314と大溝

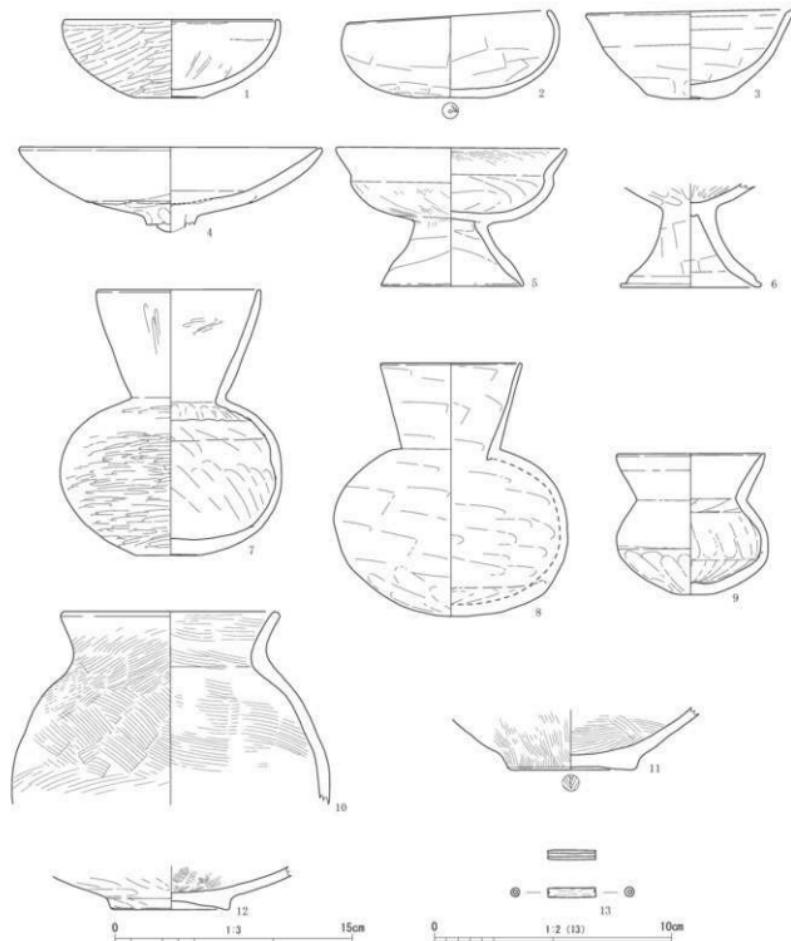


Fig. 74 Ⅷ層 出土遺物 (1)

のⅧ層もしくはⅦ層をまたいで出土しており、大溝の初現と形成時期については、今後の課題である。SD314より出土した土師器を3点、木製品3点を図示した。1は長頸壺の口縁部。2は広口壺。3は壺の底部。いずれも古墳時代後期の所産である。4は鋤と考えられる加工材である。5・6は有孔の加工材で用途は不明。

(5) Ⅷ層出土遺物

概要 平面的にも層位的にも散在的に出土しており、数は少ない。須恵器は出土していない。土器類12点、玉類1点、木製品2点を図示した。

土師器 (Fig. 74)

1～12は土師器である。1・2は内彎する壺である。1は外面ミガキ調整。2の底部はケズリ調整。3は外反する口縁を有する鉢である。底部を蛇の目状に周回するように静止ヘラケズリ調整を施す。4～6は高壺。4は半球状の壺部。5は鉢型の壺部を有する。7・8は直口壺である。7は外面にミガキ調整を施す。9は小型の甕。10はくの字口縁。11・12は壺甕類の底部。11の外面には木葉痕が観察できる。

石製品 (Fig. 74) 管玉1点を図示した。13は径0.42cm、長さ2.1cm、重さ0.2g、石針による穿孔と考えられる。材質は碧玉。

木製品 (Fig. 75) 木製品を2点図示した。14は板状の加工材、中央付近に幅11.0cm、奥行0.55cmの抉り状が観察できる。残存長32.0cm、厚さ4.5cm。断面形は長方形を呈する。15は杭状の加工材、先端はあまり丁寧な尖らせ方ではない。残存長は21.8cm、径は4.5cm。

(6) 小結

大溝Ⅷ層は既往調査と同様に溝幅が大きく広がる。19次の調査では、Tr-1、Tr-2では両側に広がり、Tr-3においては片側（南側）にのみ大きく広がり、Tr-3付近で南側が膨らむ、もしくは湾曲すると考えられる。遺物は古墳時代中期後葉を中心とするが、僅かではあるが、弥生時代後期、古墳時代前期のものも出土している。

またⅧ層以前の枝溝であるSD314を検出したことも大きな成果であった。

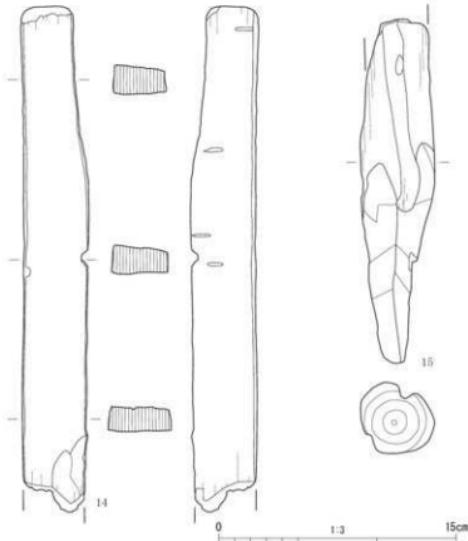


Fig. 75 Ⅷ層 出土遺物 (2)

4 伊場大溝VII層の調査

(1) 概要

VII層は、古墳時代後期（6世紀中葉）から飛鳥時代（7世紀）にかけて堆積が進行したと考えられる。VII層は灰色、褐色シルトと灰色砂が交互に堆積し、2.7 m程の層厚、最深の標高は-2.5 m程である。鳥居松遺跡5次調査にてVII層堆積中に流路の更新がありVIIb層とVIIa層に細分されているが、本調査では確認できなかった。また、伊場遺跡の調査では、VII層とV層を分層する間層としてVI層の堆積が確認されている。VI層はVII層の最上層に堆積した砂層であると考えられているがその堆積は普遍的ではなく、19次調査においても確認されなかった。貝塚は2箇所検出され、伊場大溝では類例の少ないVII層に帰属する。

(2) 伊場大溝の形状

VII層は、標高-2.15 mから0.52 mに堆積する部分であり、下層のVII層を抉り堆積したと考えられる。このため、伊場大溝の底面はVII層に相当すると考えられる。VII層堆積時の大溝の平面形は北西から南東方向にほぼ直線方向に延びるが、Tr-3周辺にて流路の中心が東側に約2.1 m移動する。VII層の大溝は幅15.9 m、検出面からの深さ2.67 mを測る。底面の高低差は、調査区北西側が南東側より0.7 m程高いことから、北西から南東方向に水が流れていると考えられる。大溝の底面には激しい水流による部分的な窪みを確認しており、最深部の標高は-2.5 m、検出面からの深さは約3 mにまで達する。

(3) 遺物の出土状態

VII層から出土した遺物は、大溝の底部に出土位置が集中する傾向がみられる。大溝の底部から検出した3箇所の窪みからの遺物の出土は少なく、窪みが埋没した後、大量の遺物が底面及び底面付近に堆積したと考えられる。これは、鳥居松遺跡5次調査や梶子遺跡13次調査で大溝の底部に位置する川底溝が埋没した段階において、大溝の底面に極めて大量の遺物が堆積した状況に類似する。

VII層における遺物出土状況をFig.77に示したが、大溝が直線状に延びる調査区北西部から中央部付近は遺物が大溝の底面中央付近に偏るが、大溝の中心が東側へ移動する調査区南東部では、遺物が大溝底面の南西岸側に偏る。これは、遺物がSD314との合流した水流により押し流された可能性や調査区南東部で東側に移動するため流れが緩やかになる南西岸に集中して堆積したと推定される。

(4) 貝塚

SS13 SS13は大溝の中央部よりやや南側の西岸斜面に位置する。検出された規模は長軸0.59 m、短軸0.47 mで、貝層は計測が困難である程薄い。規模はIV・V層で検出された貝塚も含めて最小規模である。遺物は出土していない。

SS14 (Fig.78・79) SS14は大溝の南東部の底部付近に位置する。検出された規模は長軸2.75 m、短軸1.74 m、貝層の厚さは最も厚い部分で0.20 mである。SS14はVII層下位の埋土中より確認さ

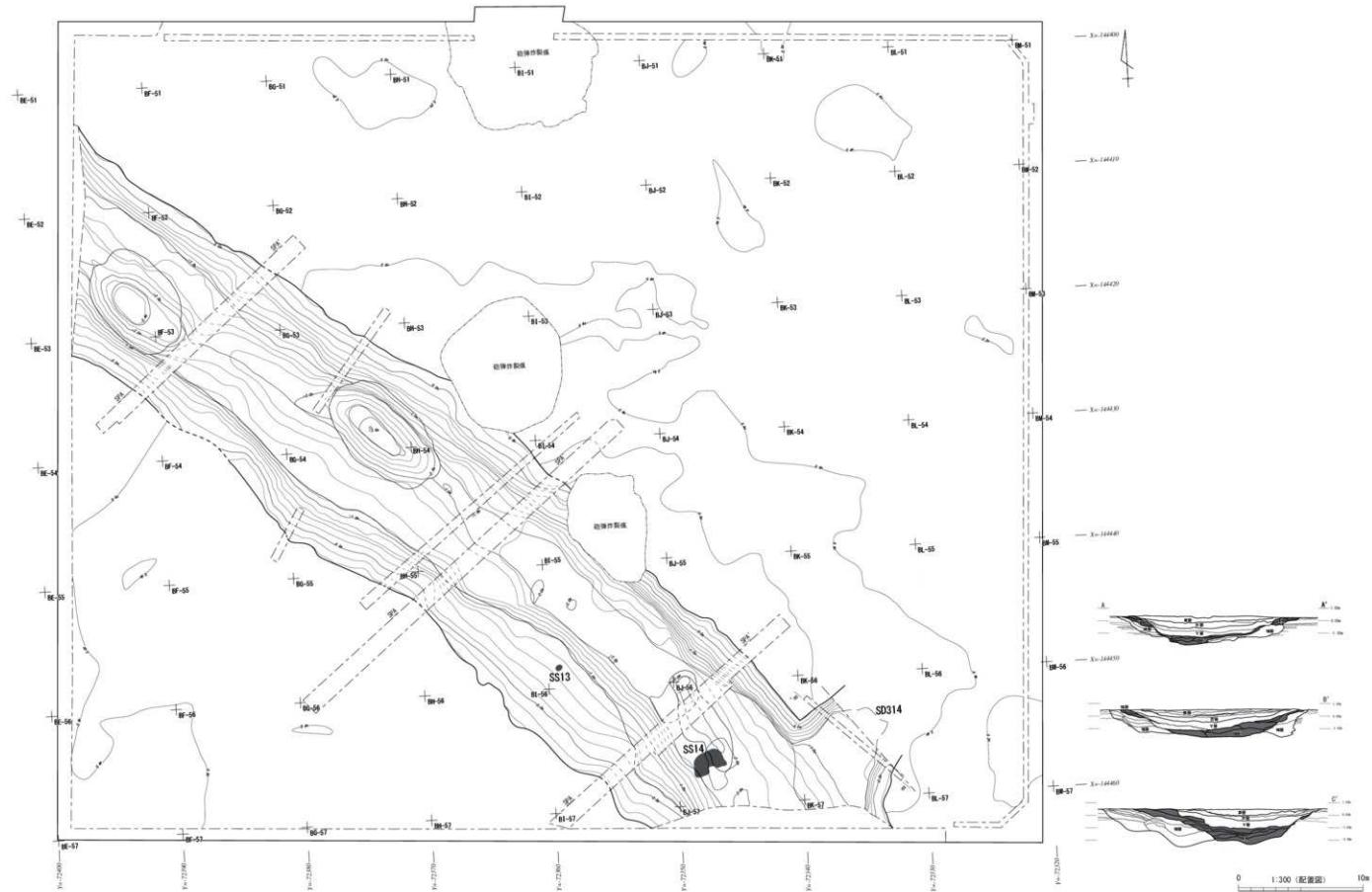


Fig. 76 D区 伊場大溝VII層

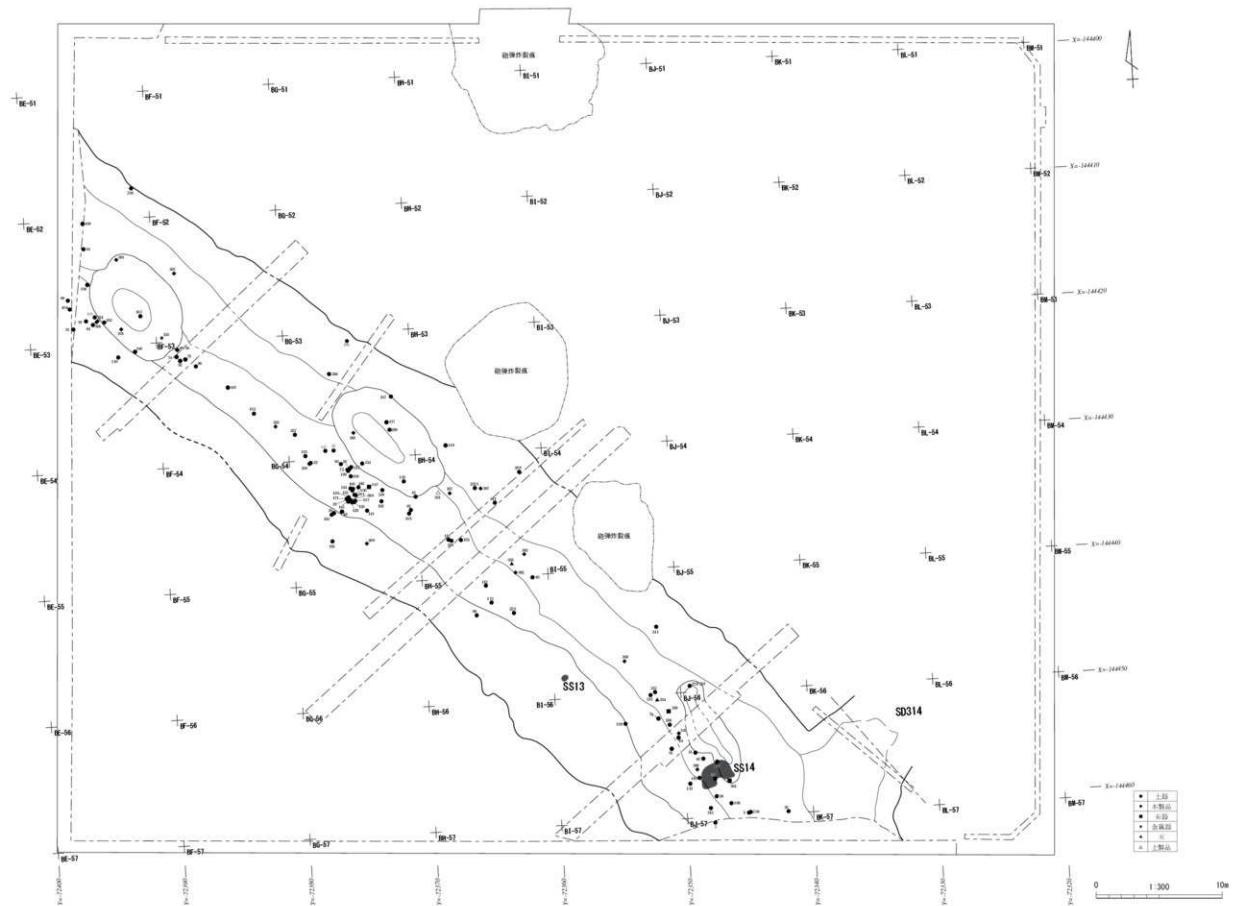


Fig. 77 D区 VII層における遺物出土位置

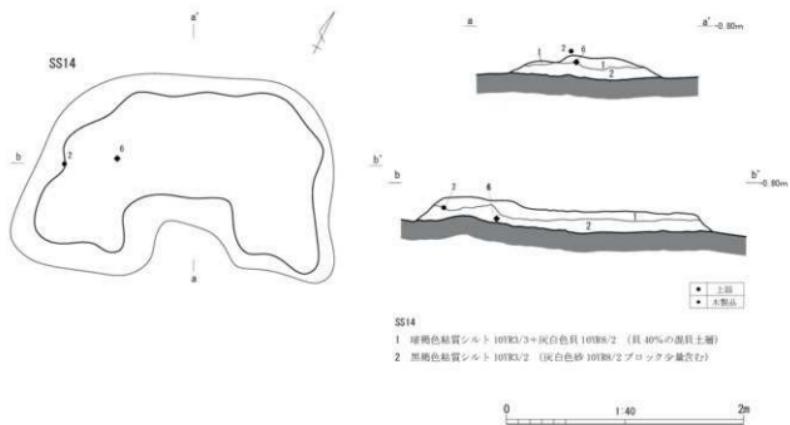


Fig. 78 SS14 実測図

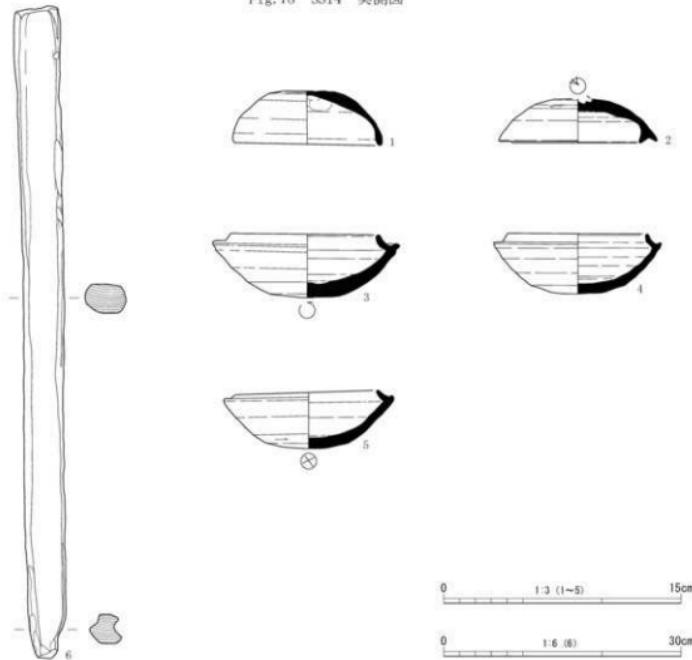


Fig. 79 SS14 出土遺物

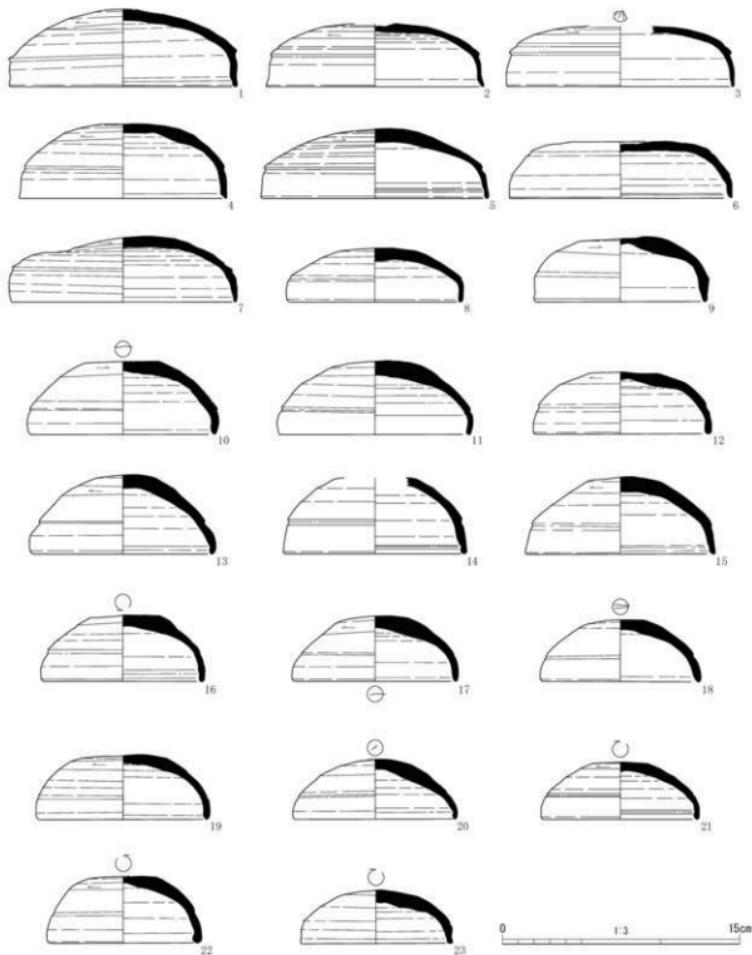


Fig. 80 VII層 出土遺物 (1)

れたため、VII層の埋没過程において形成された貝塚である。貝の組成はダンペイキサゴ（ナガラミ）が最も多く、次いでヤマトシジミとなる。遺物は土器、木製品、石器が出土している。

須恵器5点と木製品1点を図示した。1・2は壺蓋。3は返りを有しており、擴みは剥離している。3～5は壺身。受部を有しており、口縁の立ち上がりは短く内傾する。TK209～TK217（飛鳥I期）相当。6は棒状の木製品。残存長83.0 cm、幅6.4、厚さ3.5 cm。

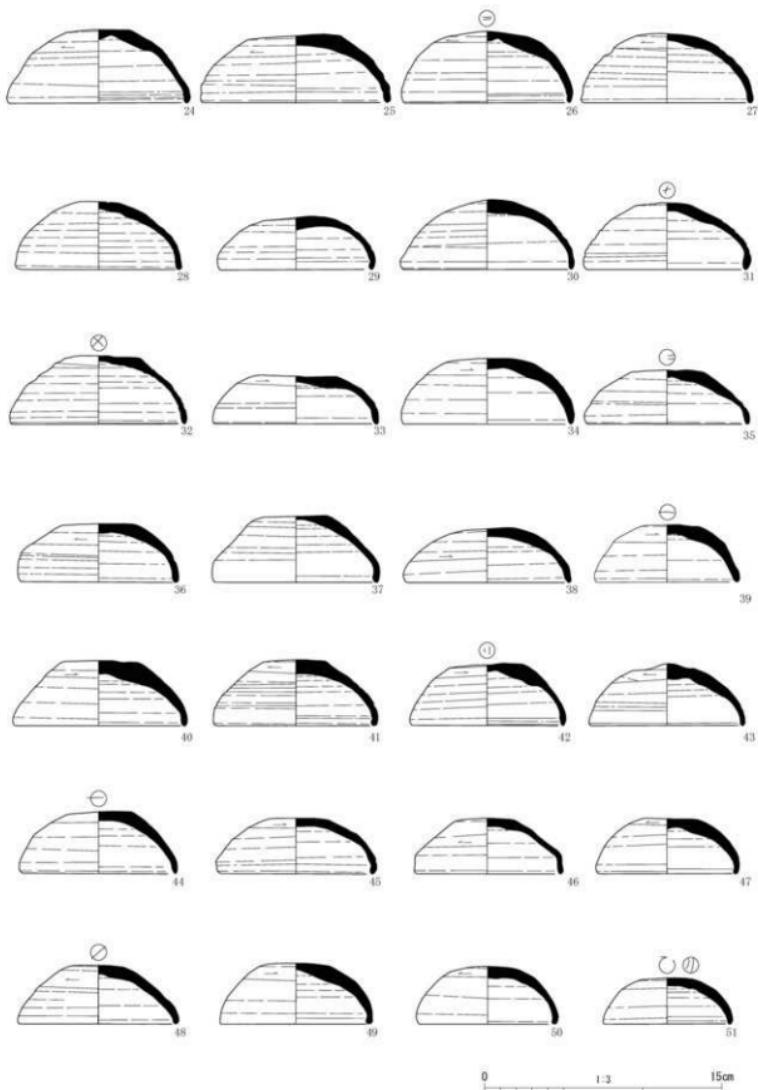


Fig. 81 VII層 出土遺物 (2)

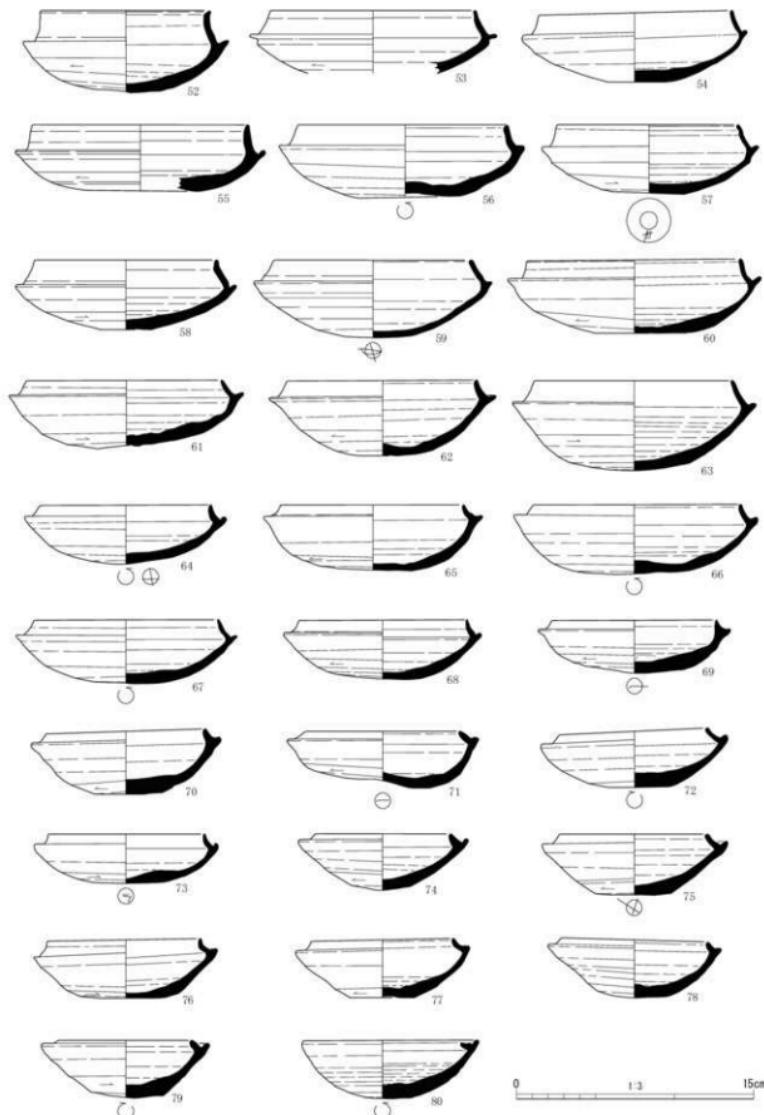


Fig. 82 VII層 出土遺物 (3)

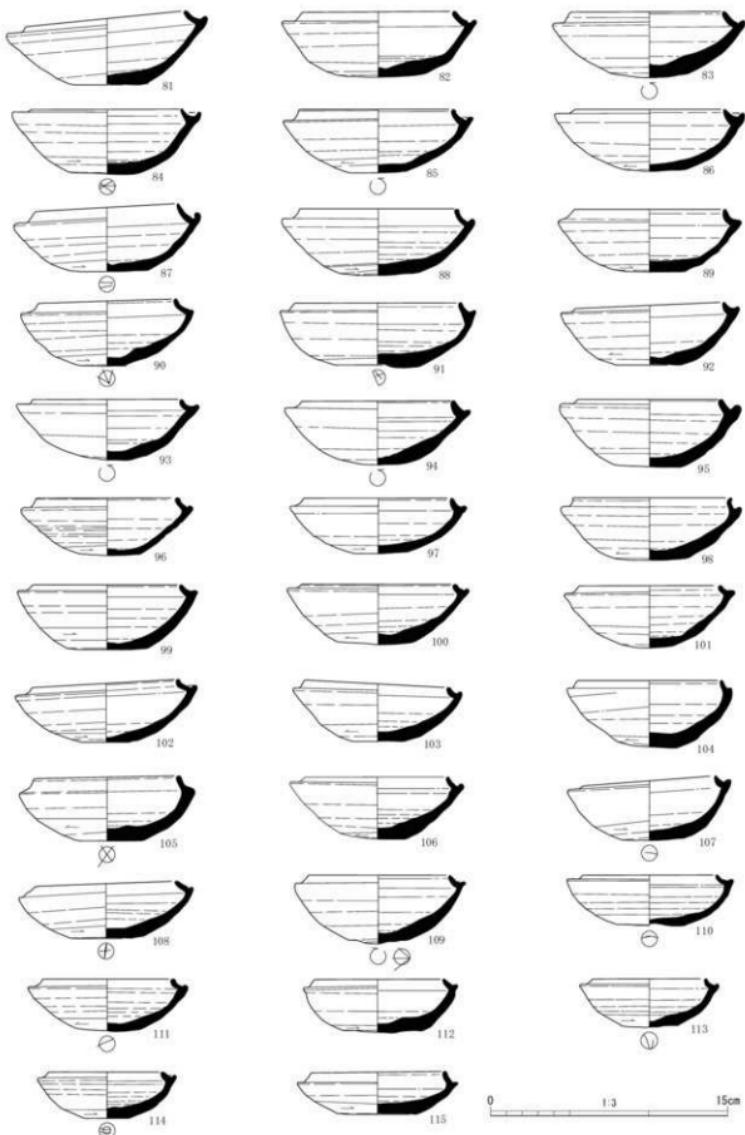


Fig. 83 VII層 出土遺物(4)

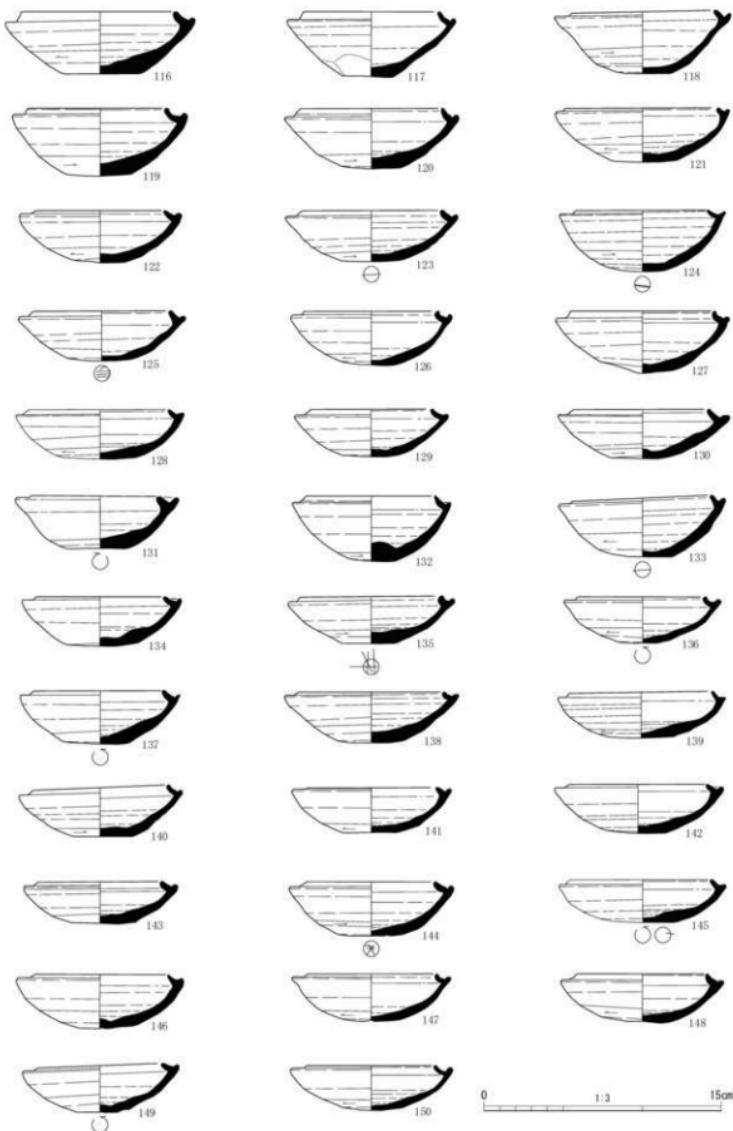


Fig. 84 VII層 出土遺物 (5)

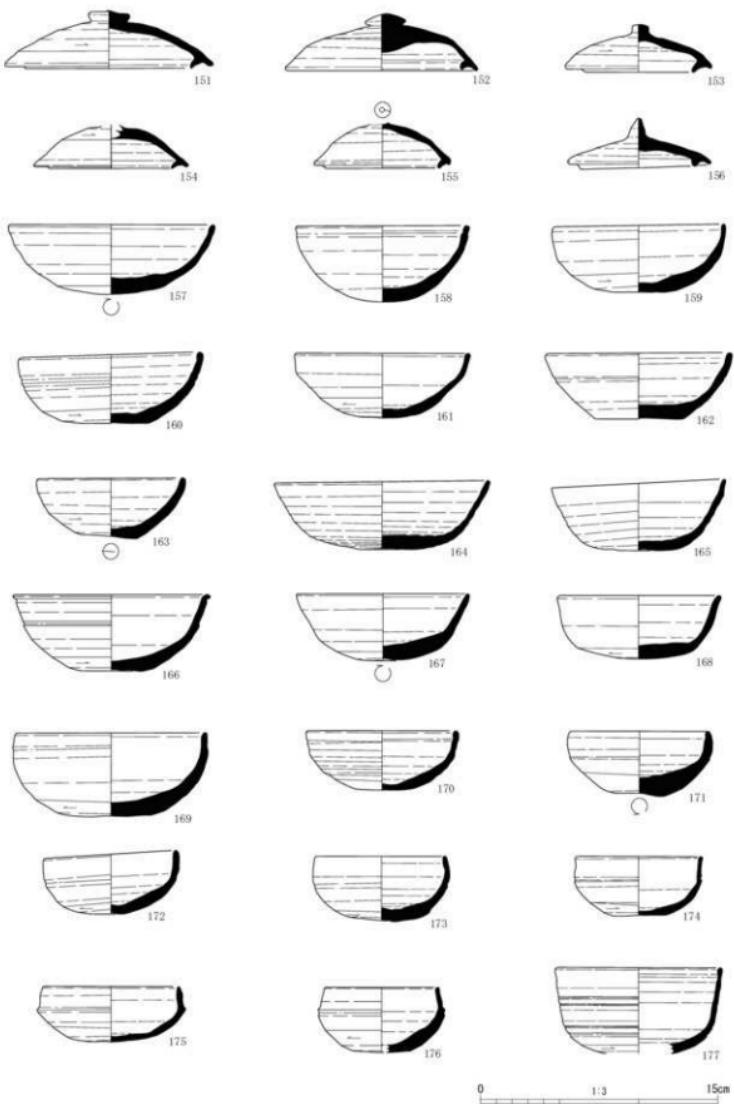


Fig. 85 VII層 出土遺物 (6)

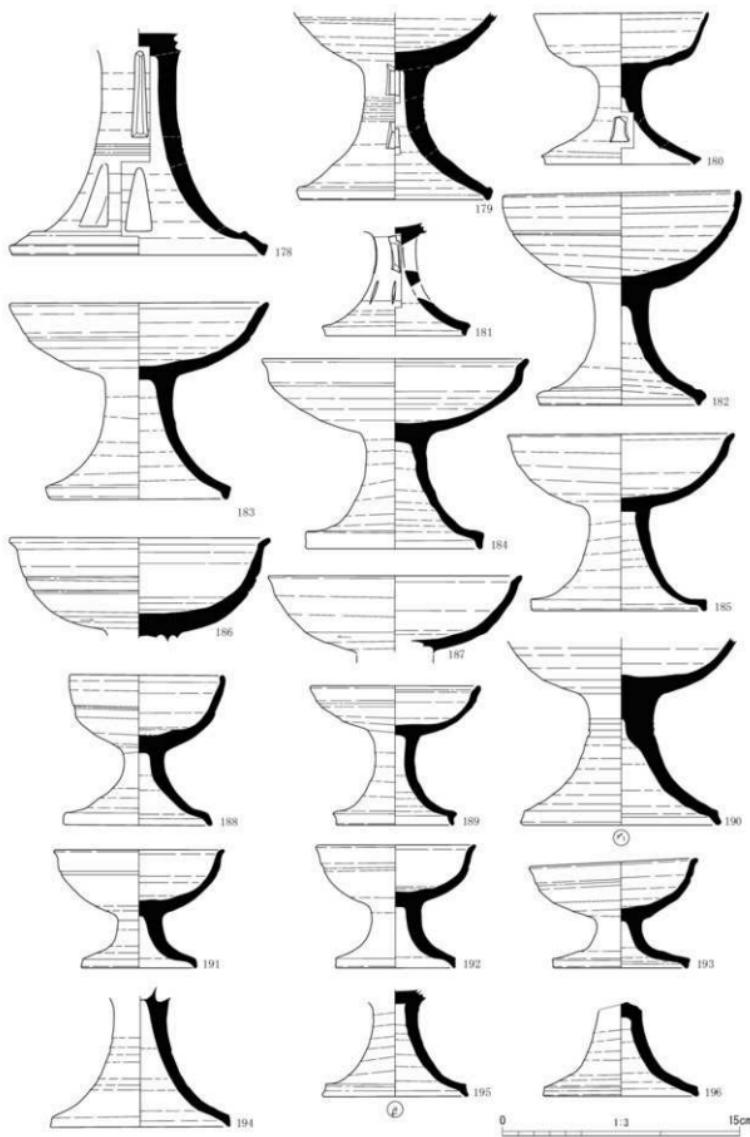


Fig. 86 VII層 出土遺物 (7)

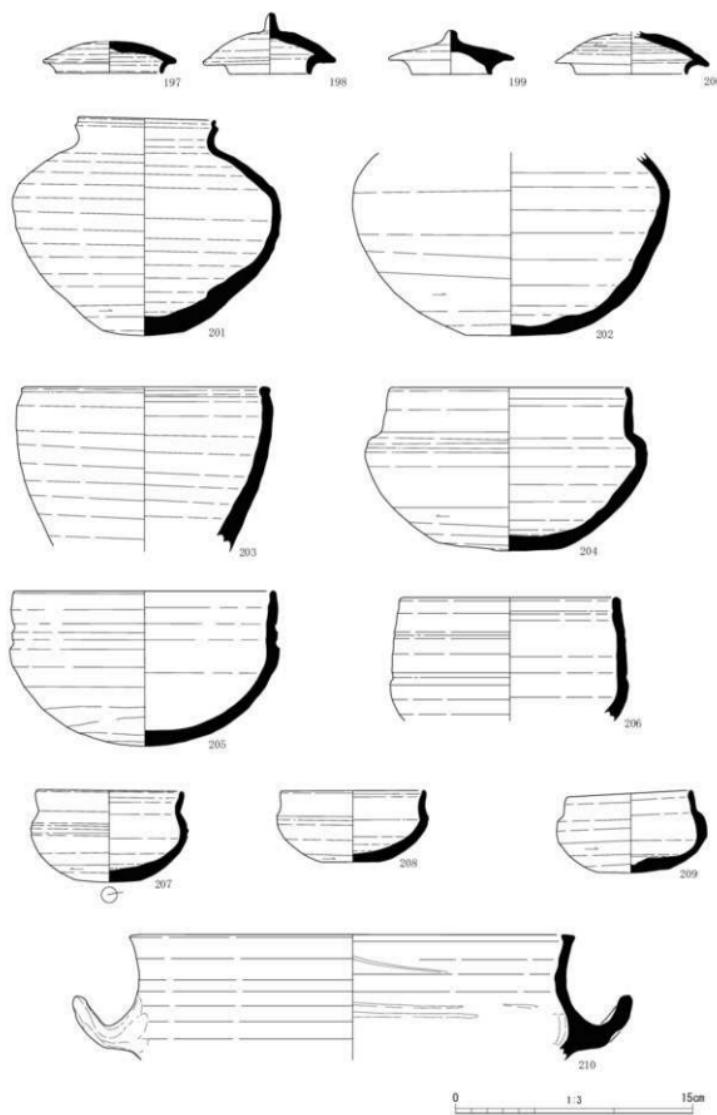


Fig. 87 VII層 出土遺物 (8)

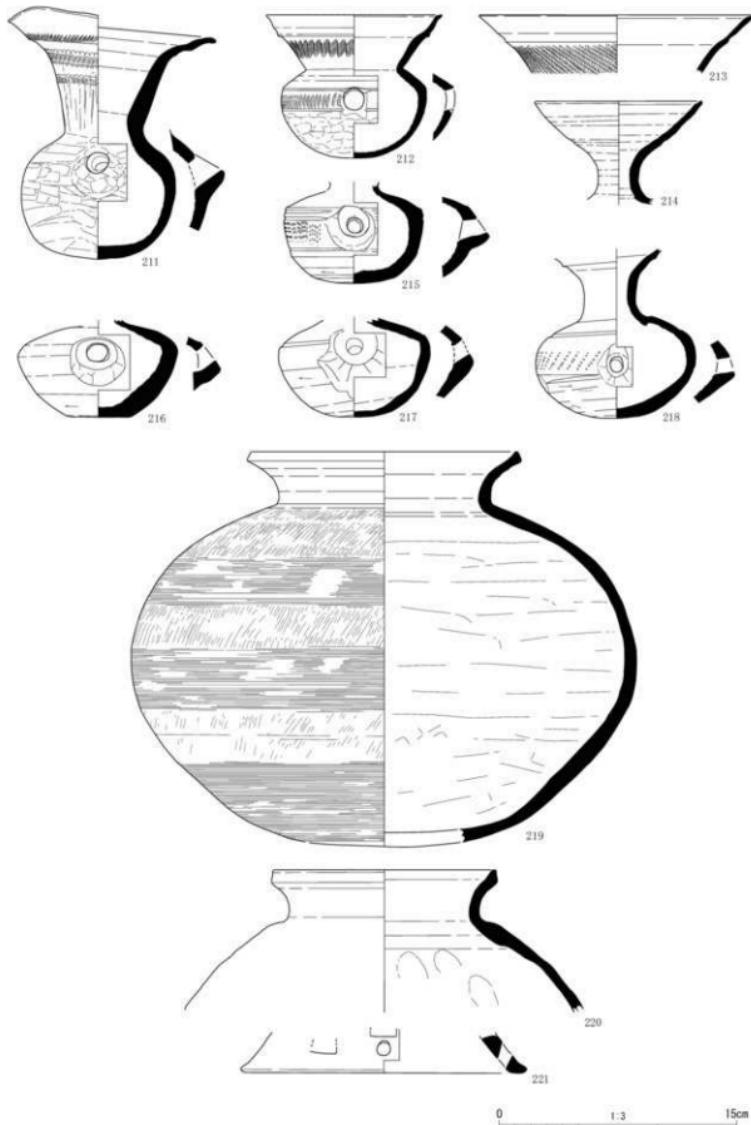


Fig. 88 VII層 出土遺物 (9)

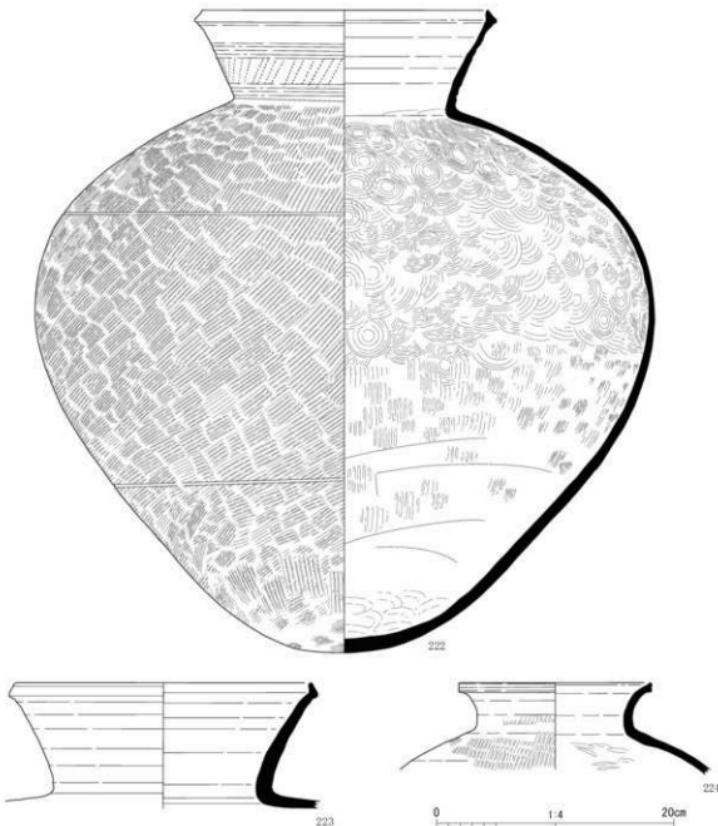


Fig. 89 VII層 出土遺物 (10)

(5) VII層出土遺物

概要 Fig. 80～111 にVII層から出土した遺物を示した。VII層からは須恵器、土師器、玉類、金属器、土製品、石製品、木製品など多種多様な遺物が出土した。図示した遺物点数は 397 点である。少量ではあるが古墳時代前期に帰属する土器が含まれており、VII層及び周辺構造からの混入品の可能性が高い。6世紀後半から7世紀代に帰属する土器が大半を占める。

須恵器 (Fig. 80～89) VII層から出土した須恵器を 1～224 に図示した。壺蓋と壺身が圧倒的多数を占めるが、高壺、壺、陶臼、罐、甕、盤などの器種が存在する。1～51 は壺蓋である。天井部との間に鋭い稜を有する古手の個体も存在するが、主体は 6世紀後半 (TK43 並行期) 以降のものである。52～150 には壺身を図示した。壺蓋と同様、古手の様相を示すものもあるが、主体は

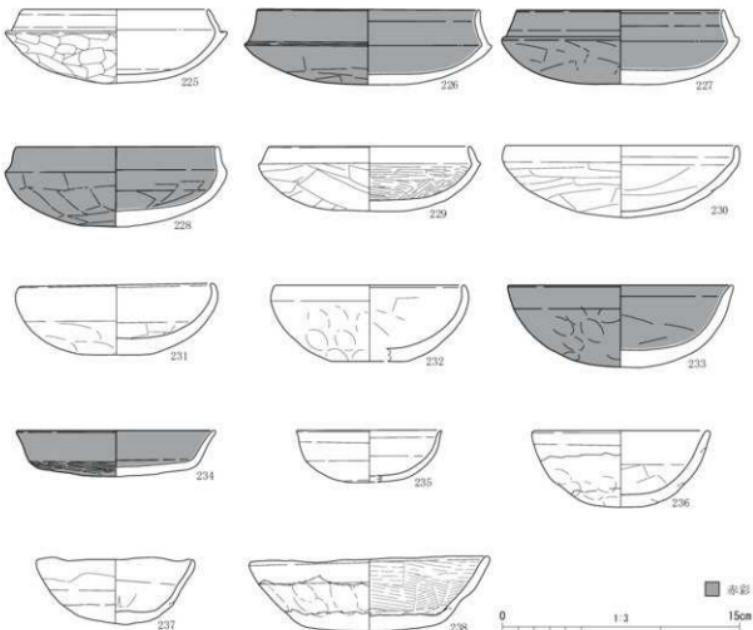


Fig. 90 VII層 出土遺物 (11)

6世紀後半以降のものである。143のように径が小さく立ちあがりも扁平なものも含み、時期と変種は豊富である。151は宝珠状の扁平な摘み有する。返りは有さない。152～156は返り蓋である。157～171は無台碗である。172～177は盤である。盤は湖西窯特有の器種と考えられている。178～196は無蓋高坏である。178～181は脚部にスカシ孔を有する高坏である。197～200は蓋であるが、直径9cm以下の小型品であることから、坏身に伴うものではなく壺類の蓋と考えられる。201は広口壺、202は壺の底部である。203は陶白である。204・207～209は短頸壺である。204は口径が14.8cmとやや大きい。207～209は口径が10cm以下と小型である。205・206は丸い底部をもつた鉢型の土器である。盤の一種と考えられるが、特異な形態の土器である。210は把手を有する瓶であろうか。211～218は甕である。古手の様相を示す212を除き、主として体部に開けられた孔はいずれも突出した形状であり、新しい要素を示す。219～224は甕であるが、219・222～224には共通して外面に平行タタキで調整されている。220は壺の可能性もある。221は壺甕類の脚台。

土師器 (Fig. 90～100) 225～328はVII層から出土した土師器である。坏や高坏、壺、甕、瓶など多様な器種が確認できる。須恵器と比較して破片化した個体が多く、図示できたものは出土量に対して少なかった。一部の土器には5世紀代の特徴をもつものがあり、VII層からの混入品と考えられるが、おおむね6世紀後半から7世紀代の土器組成を良く示している。

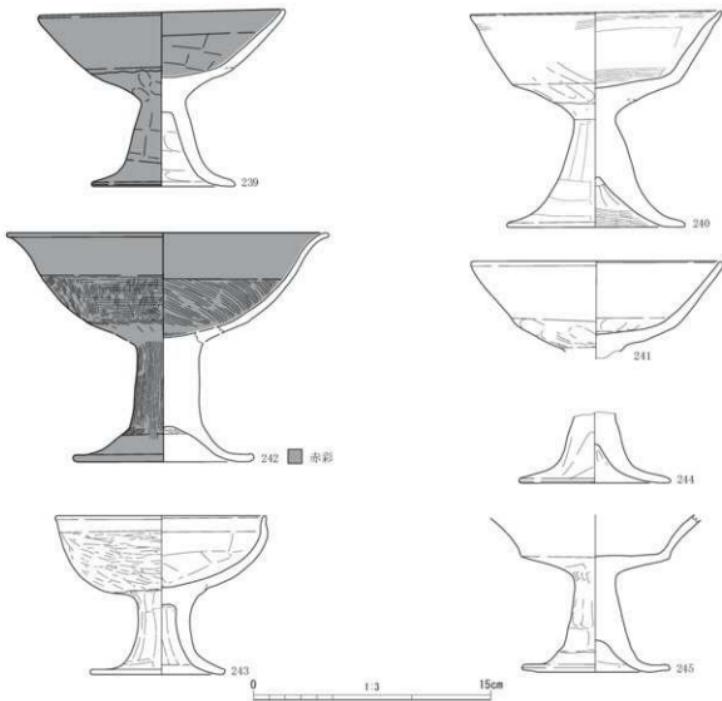


Fig. 91 VII層 出土遺物 (12)

225～230は模倣壊である。須恵器の壊身を模倣したものである。体部外面はすべて静止ヘラケズリ。229は内面にミガキ調整が施され、精緻なつくりである。230は受部を有しない。壊蓋を模倣した可能性もある。231と232は口縁端部が内彎する形状の壊である。233～237は口縁部が外反もしくは外傾する壊。238は逆台形の鉢。内面にハケ調整を施す浅鉢。239～245はいずれも高壊である。240は長脚高壊である。壊部の形態は239・240・241・245のような有稜のものと、242・243のような鉢形のものに分けられる。240・242・245は中実になるなど新手の様相を示している。脚部は中実になるとともに屈折も不明瞭になり、新手の様相を良く示す。6世紀後葉のごく短期間に出現する形態の高壊である。鉢形壊部高壊は、壊部が外反するものと、口縁が内彎傾向のものの2形態がある。有稜高壊と比較して脚部の形態にも明確な違いがあり、底部に向かってハの字形に開く形状である。246～256には壺類を示した。246は広口壺。247・248・255・256はいずれも外反口縁壺と考えられる。247のような球形の体部に大きく反り返った口縁部が付くが、250～254は口縁部のみで壺である可能性もある。251は折返口縁壺。257～299には壺類を示した。壺類は大きく分けて257～259・262～265のような台付のものと、266～299のような無台のもの

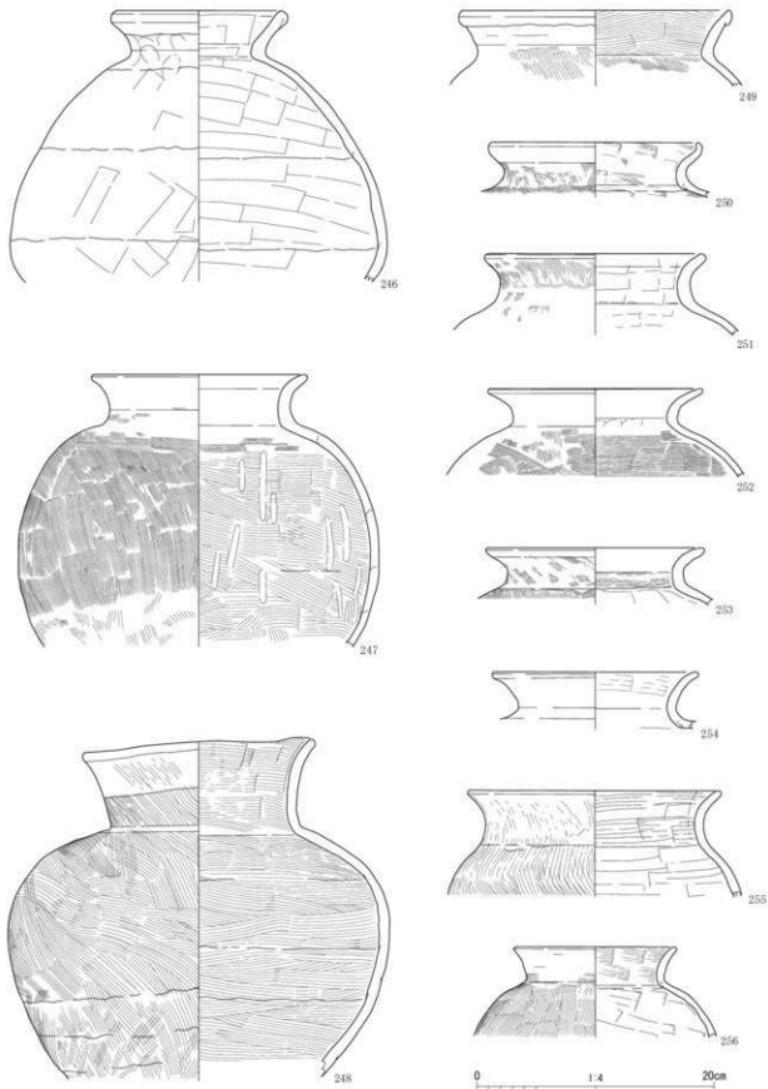


Fig. 92 VII層 出土物 (13)

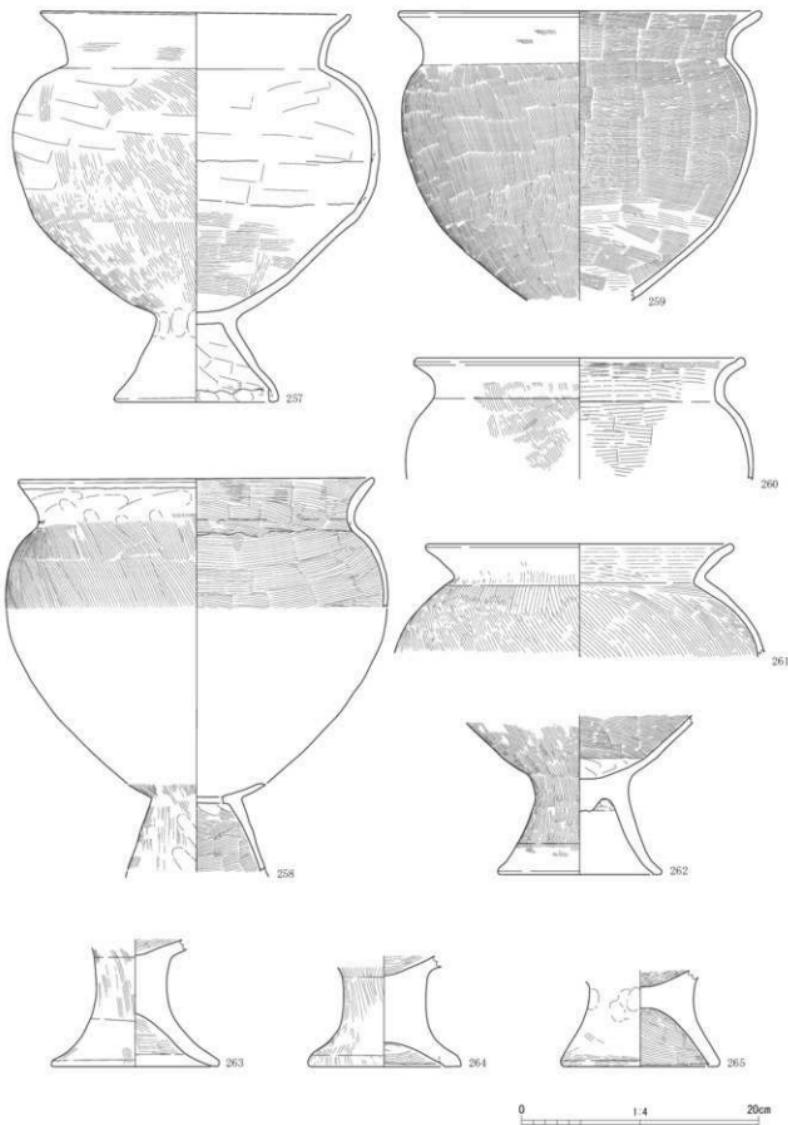


Fig. 93 VII層 出土遺物 (14)

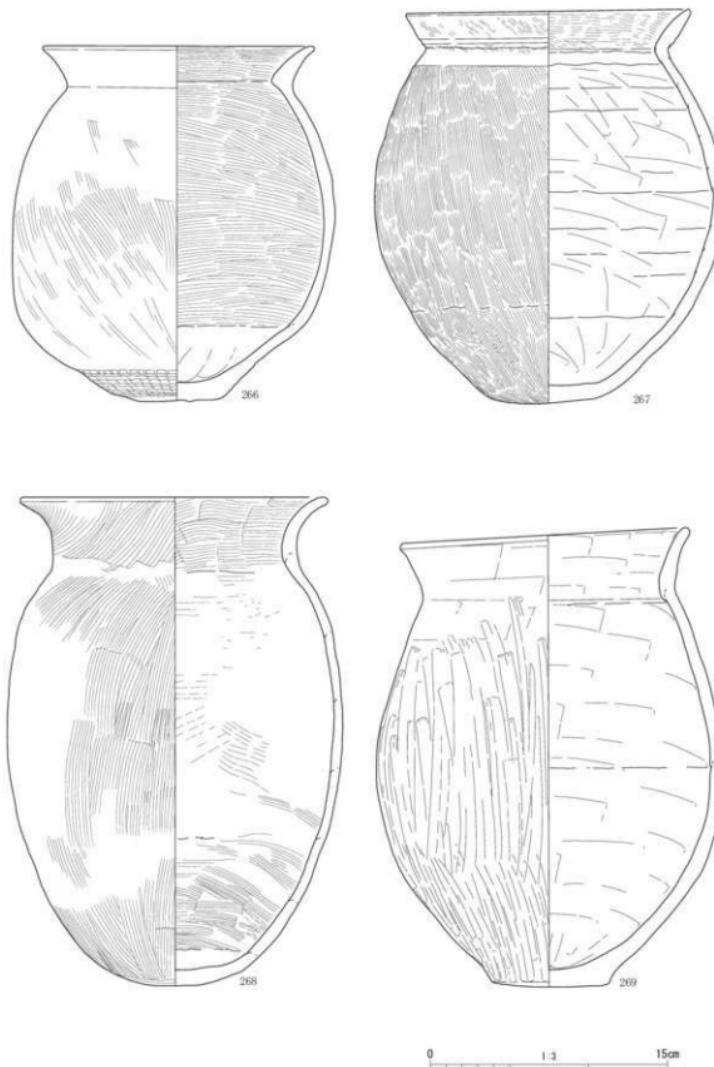


Fig. 94 VII層 出土遺物 (15)

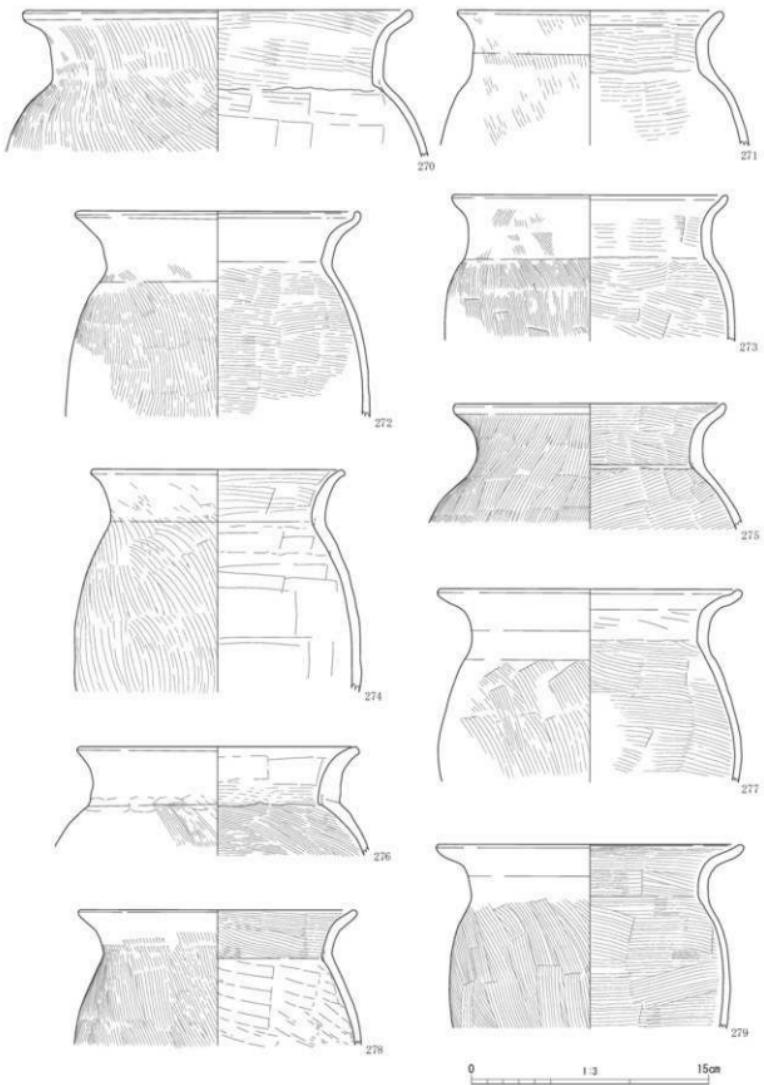


Fig. 95 VII層 出土遺物 (16)

4 伊場大溝VII層の調査

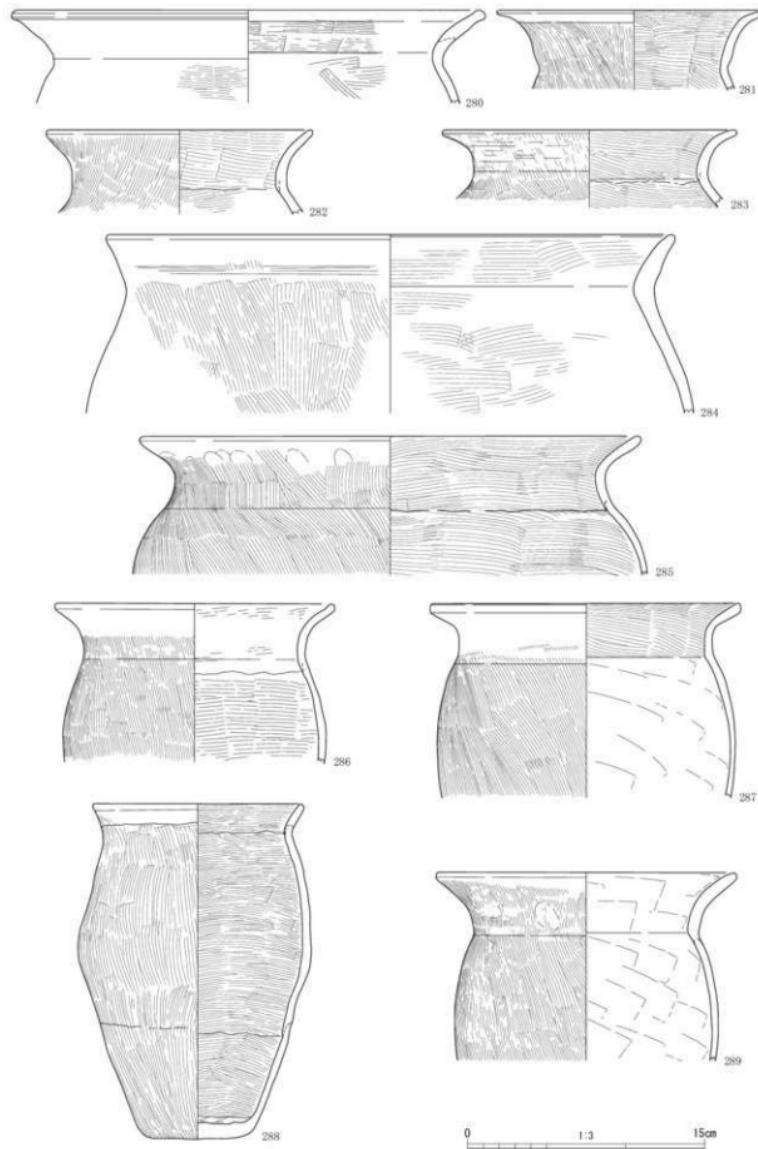


Fig. 96 VII層 出土遺物 (17)

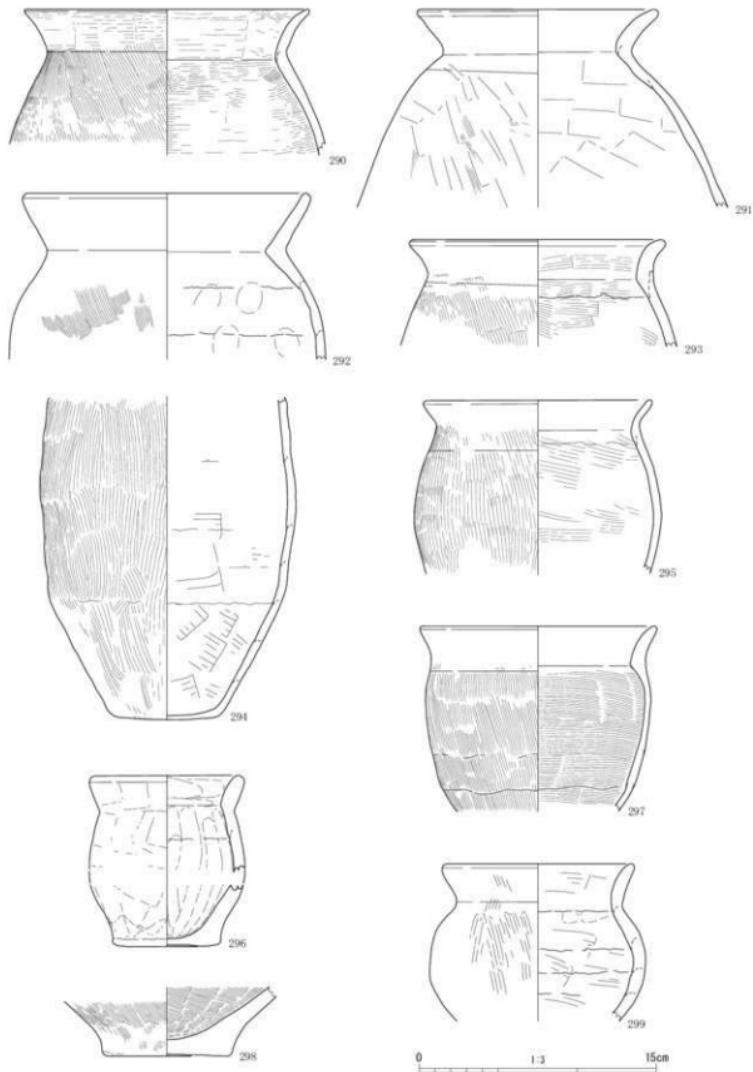


Fig. 97 VII層 出土遺物 (18)

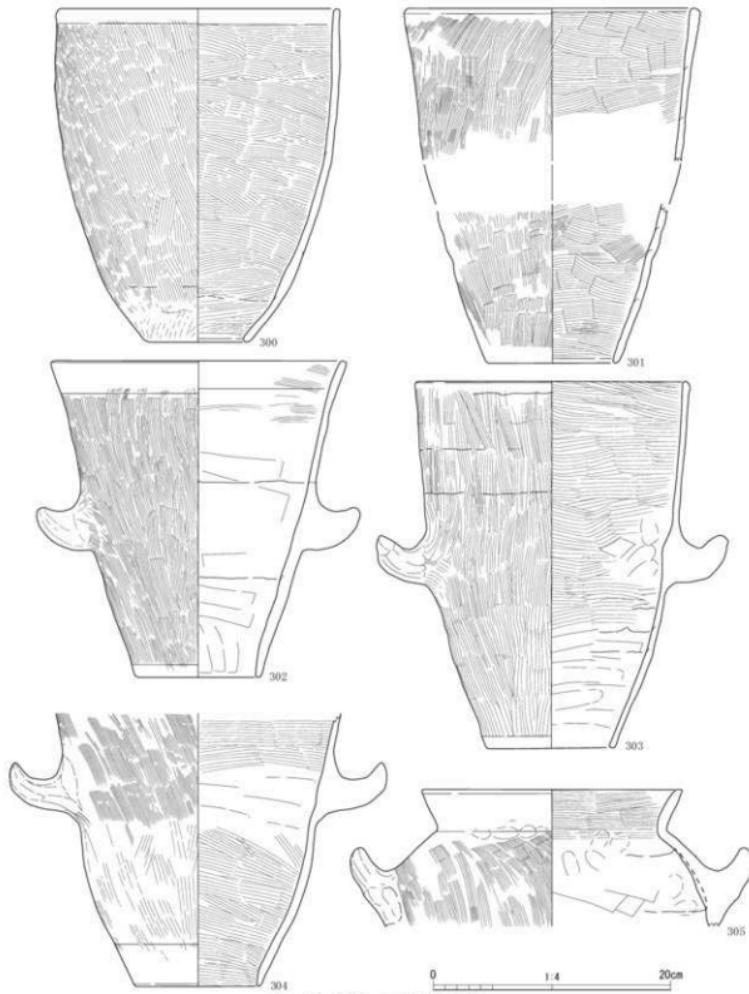


Fig. 98 VII層 出土物 (19)

が存在する。台付甕は全般的に口径が大きく、底部には台形型の脚部が付く。脚部には中空のものと、中実になるものがある。無台の甕は、小型かつ短胴のものと長胴のものがある。長胴甕の肩部は張っておらず、底部は丸底で楕円形に近い形状である。長胴甕は7世紀以降長胴化と平底化が進んでいくが、その前段階の特徴を良く示している。266の底部には網代痕が遺る。299は甕

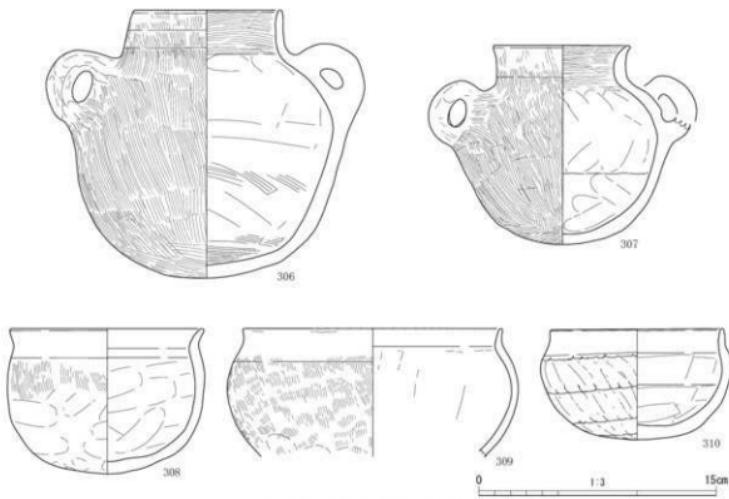


Fig. 99 VII層 出土遺物 (20)

に分類したが、壺の可能性もある。300～304は壺である。300は底部の窄まりが砲弾型になる古式の形態である。305は大型の把手付鉢。306・307は耳付短頸壺。308～325は鉢である。形態は大きく分けて3形態あり、口縁が短く外反する308～310のようなもの、315～320のような口縁が内彎するもの。318は須恵質である。321～325のような外形が逆台形を呈するものがある。326～328は小型模倣品、それぞれ鉢、碗、小壺を模倣している。

土製品 (Fig. 100) 329～332は土製品である。329は支脚か。330は焼成前に穿孔しており、勾玉を模したものか。331は土製円盤。中央部に穿孔を有する。332は筒状の土製品、土鍤か。

金属製品 (Fig. 101) 333は鉄斧である。基部を袋状にする所謂、袋状鉄斧。刃線を若干欠く。長さ9.9cm、幅4.0cm、基部径2.5～3.15cm、刃部厚0.8cm、重さ153.8g。

玉類 (Fig. 101) 334は管玉、長さ2.95cm、幅0.91cm、径0.89cm、重さ4.2g。材質は碧玉。335は小玉。長さ1.1cm、径1.0cm、厚さ0.8cm、重さ1.1g。

石製品 (Fig. 101～103) 336～353は石製品である。336は石斧、337は玉砥石、338は石鍤か。339・342・345・347・350は磨石。340・341・343・344・346・348・349は砥石。

木製品 (Fig. 104～111) VII層から出土した木製品は、47点を図示した。351～354は形代。351は長さ30.2cmの舟形。352は長さ13.5cm、幅3.3cm、厚さ0.7cmの両端を尖らせた薄い板状木製品。舟形もしくは舟串と考えられる。353・354はともに先端を刃のように尖らせている武器形。355は刻歯式の横櫛。他層出土のものと法量的にはほぼ同じであるが棟(胴)に稲妻文の透かし彫を有する。356は横杓子か。357～360は木鍤である。360のみ形状、径や長さが異なる。361は下駄。362は堅杵を転用した木製品か。363は長さ32.0cm、径4.0cmの杭状の木製品。上部に螺旋状の抉りがある。陽物形を部材に転用したものか。365は曲物底板、径は36.2cm。366は大きさや形状か

4 伊場大溝VII層の調査

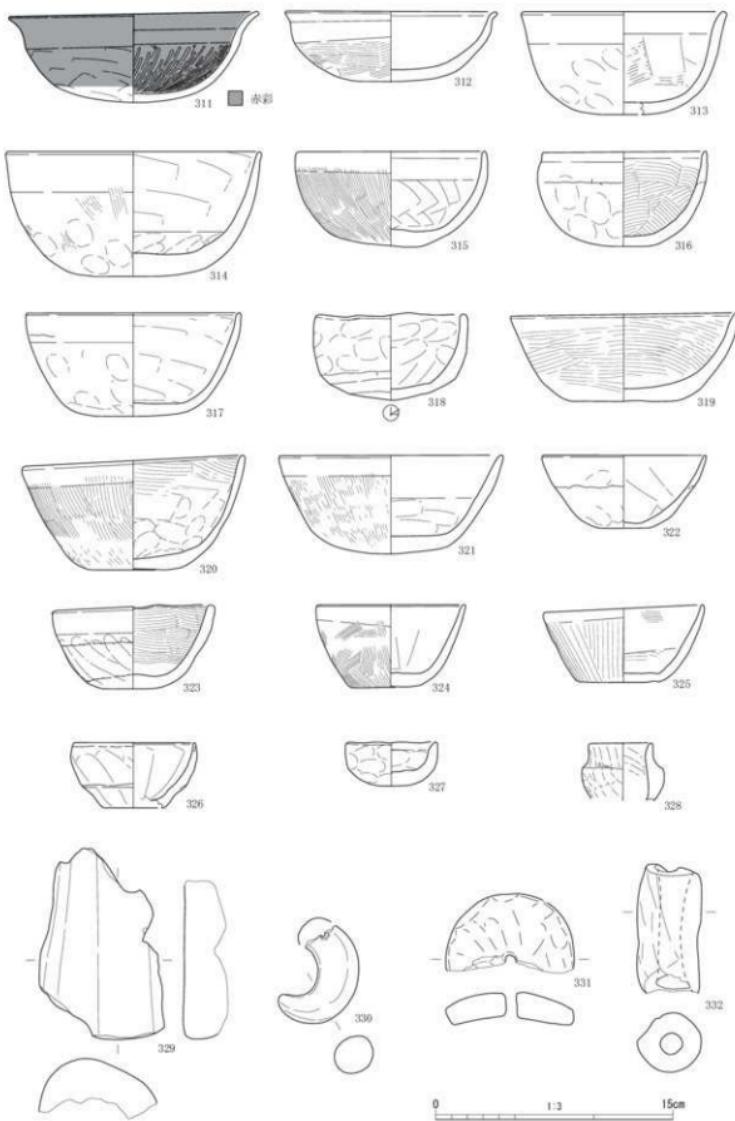


Fig. 100 VII層 出土遺物 (21)

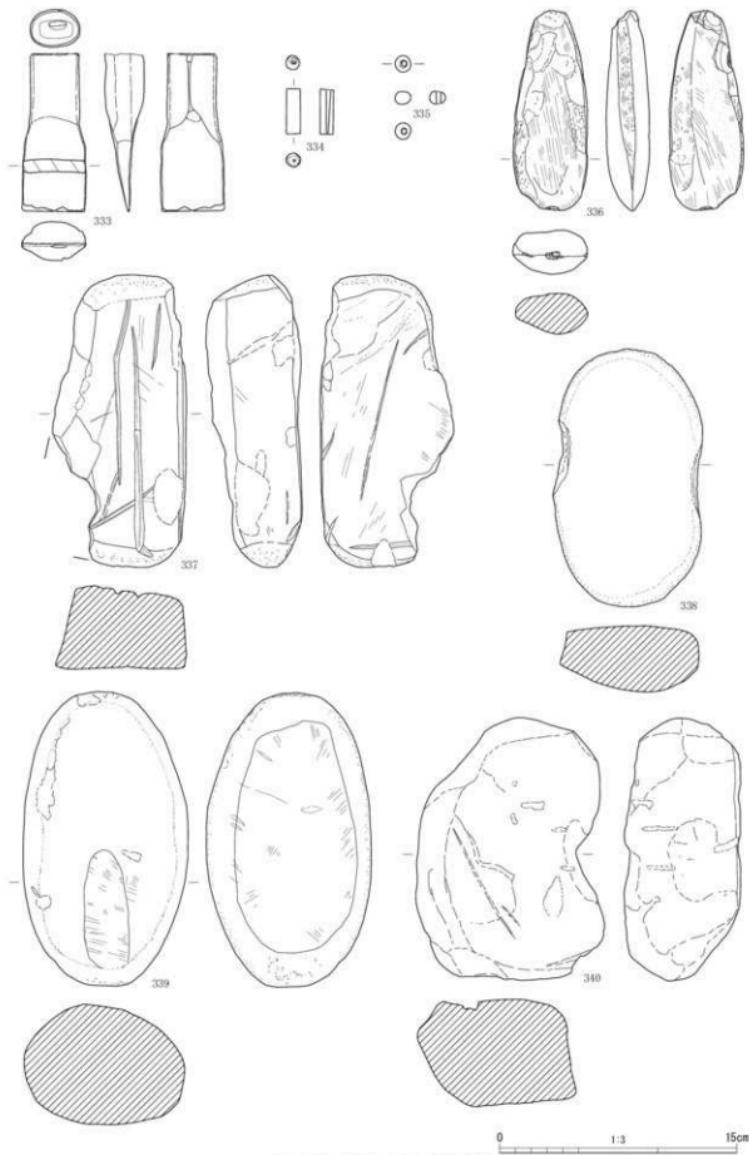


Fig. 101 VII層 出土遺物 (22)

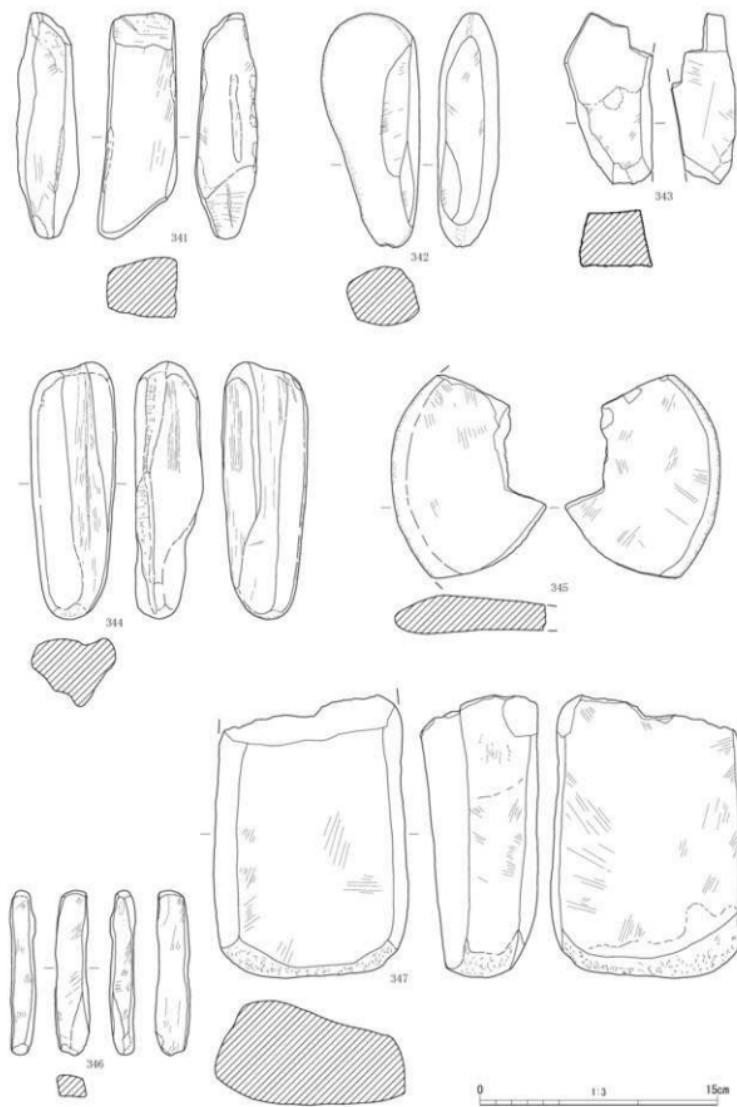


Fig. 102 VII層 出土遺物 (23)

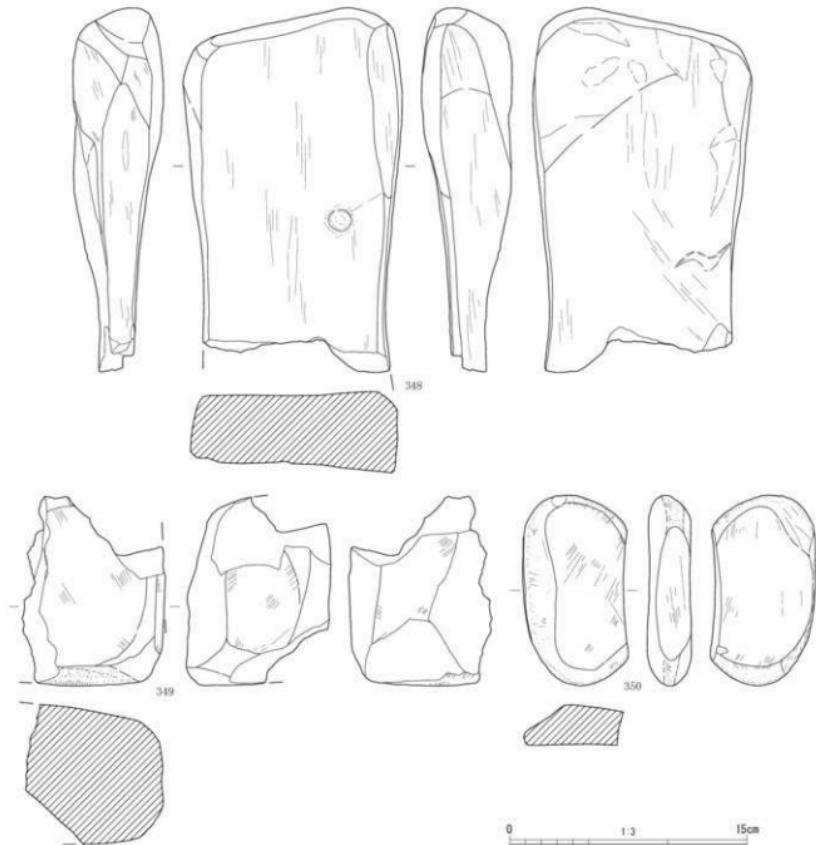


Fig. 103 VII層 出土遺物 (24)

ら田下駄の可能性も考えられる。367・371～373は有孔板。371～373は形状から木簡の可能性もあるが文字などは確認できない。369は所謂、Y字型木製品と称されている木製品。375～380は部材。顕著な加工が確認できるが用途は不明。381～384・390は杭などの先端部。385・386は堅桿。385は復元長82.5cm、握り部の径2～3cm、使用部の径は約8cmとなる。使用部の片側が全体的に摩耗しており歪である。片側を杵、もう片側を横槌として使用した可能性も考えられる。387は残存長75.5cm、幅10.6cm、厚さ2.5cmの樋状の木製品。樋としては、短く幅も厚みもなく別の用途が考えられる。389は有頭の長さ77.2cmの棒状木製品。有頭の反対側の加工痕が顕著でないことから陽物形の未製品の可能性がある。393は長さ135.5cm、径約5cm程度の細長い有頭の棒状木製品。先端は尖らせている。364・380・391・392・394～397は棒状の部材である。368はやや扁

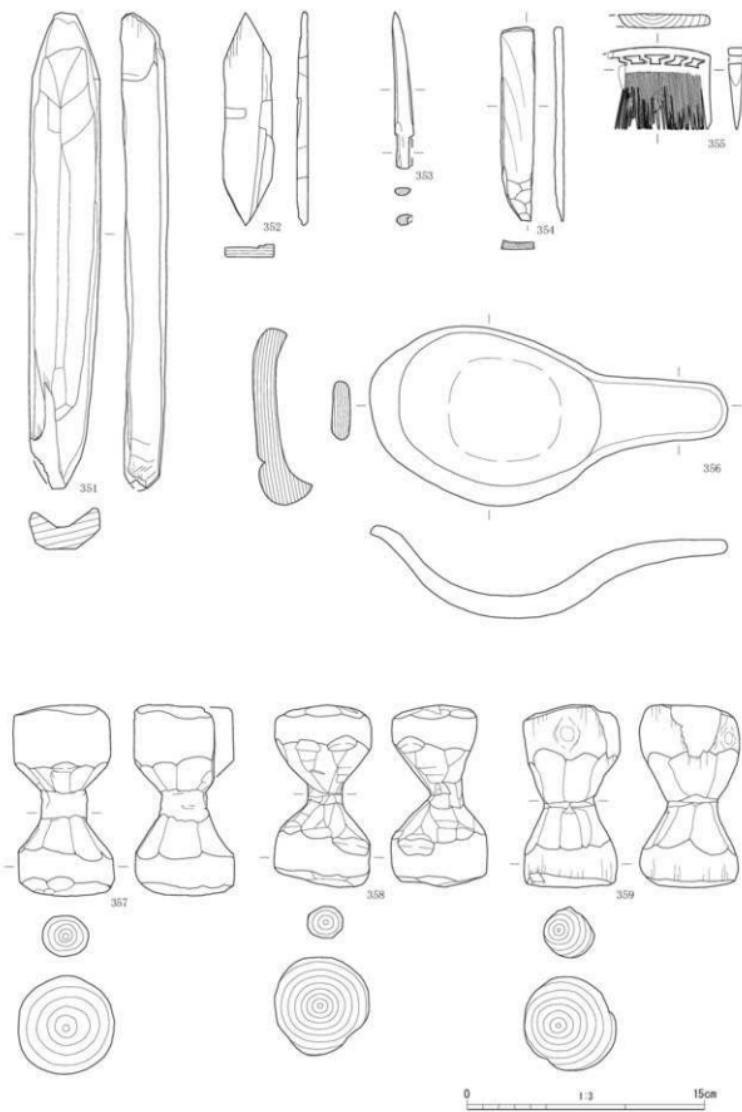


Fig. 104 VII層 出土遺物 (25)

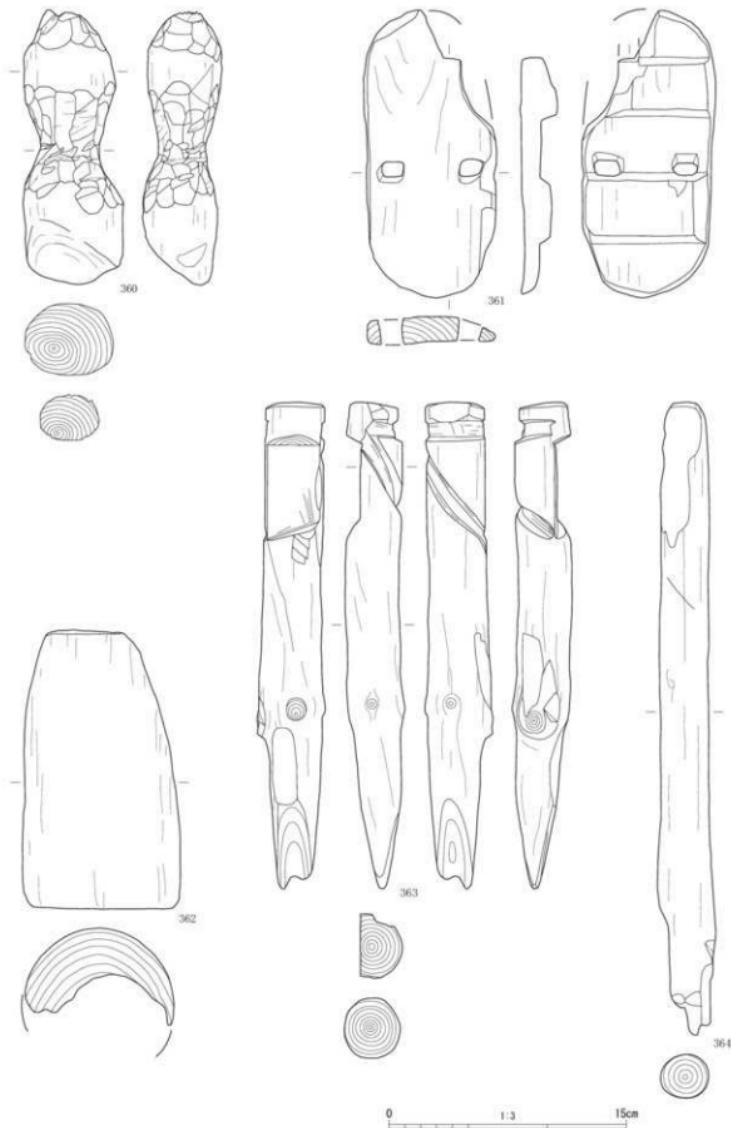


Fig. 105 VII層 出土遺物 (26)

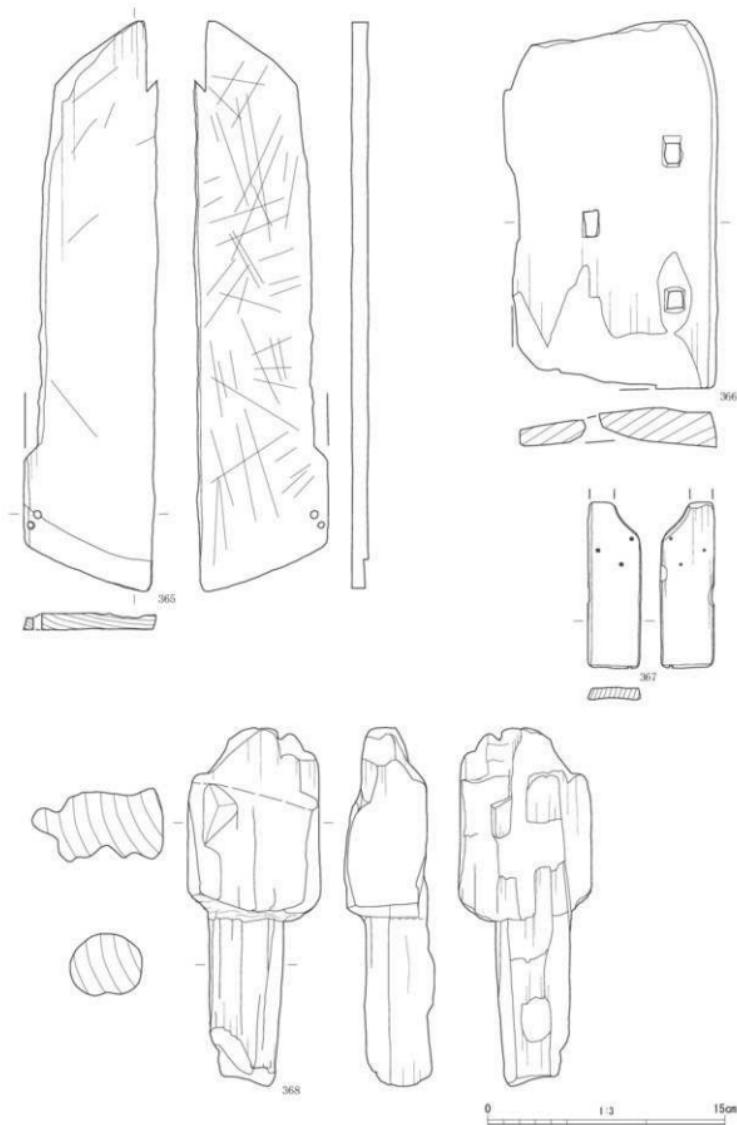


Fig. 106 VII層 出土遺物 (27)

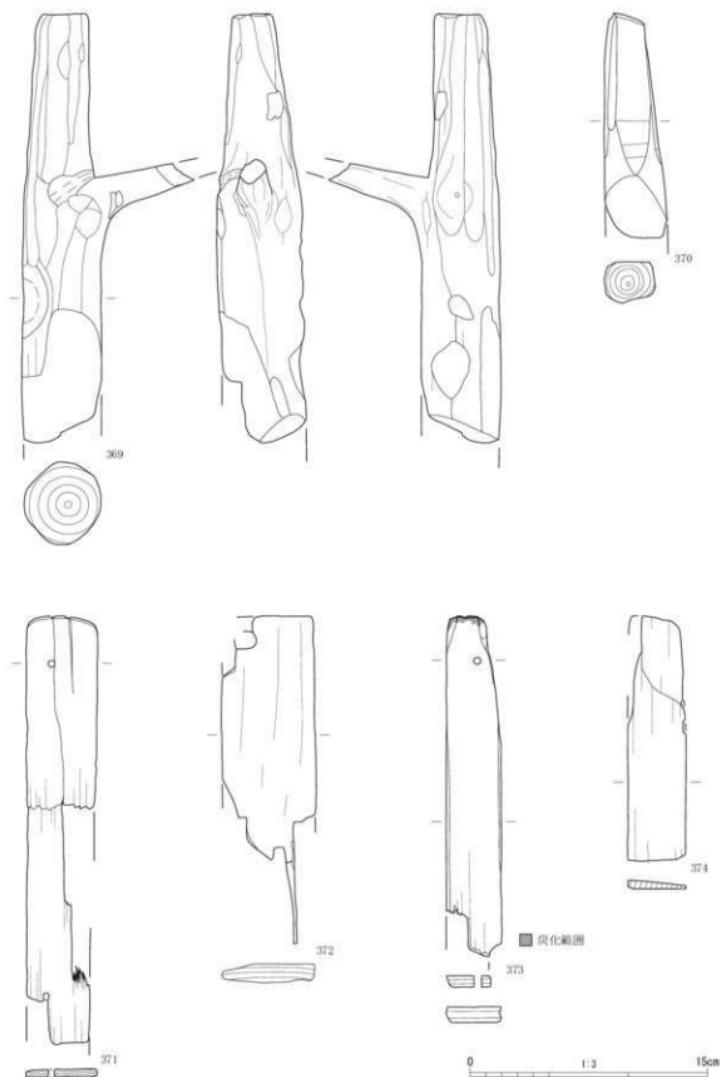


Fig. 107 VII層 出土遺物 (28)

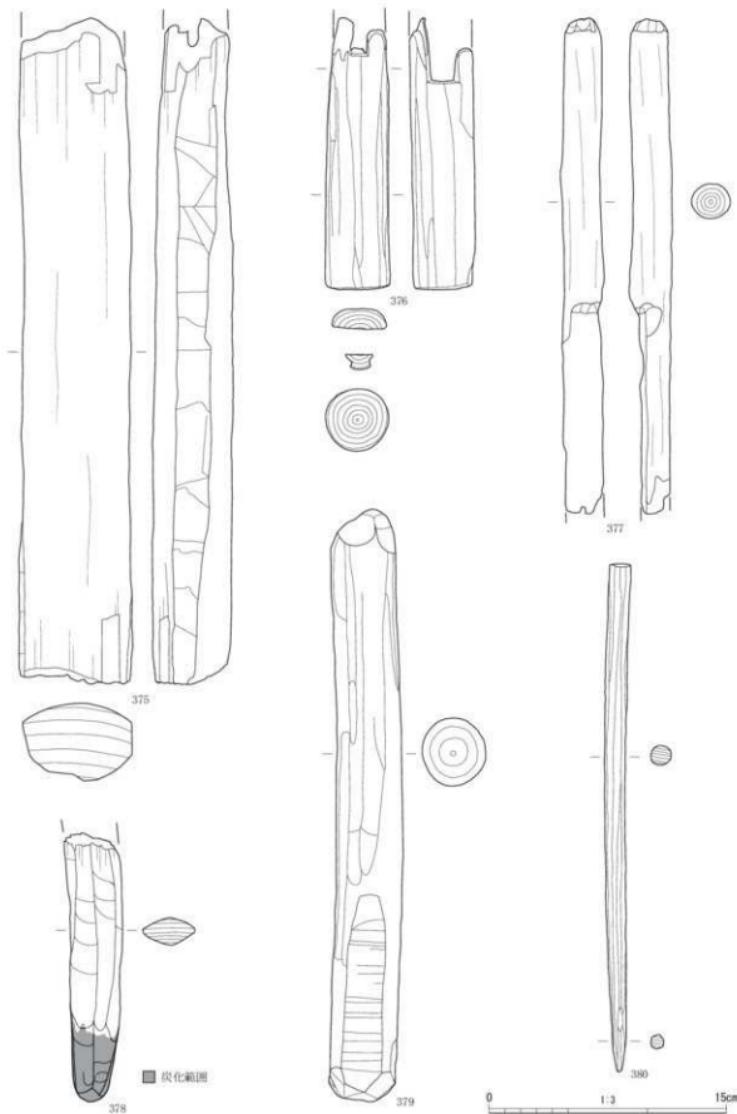


Fig. 108 VII層 出土遺物 (29)

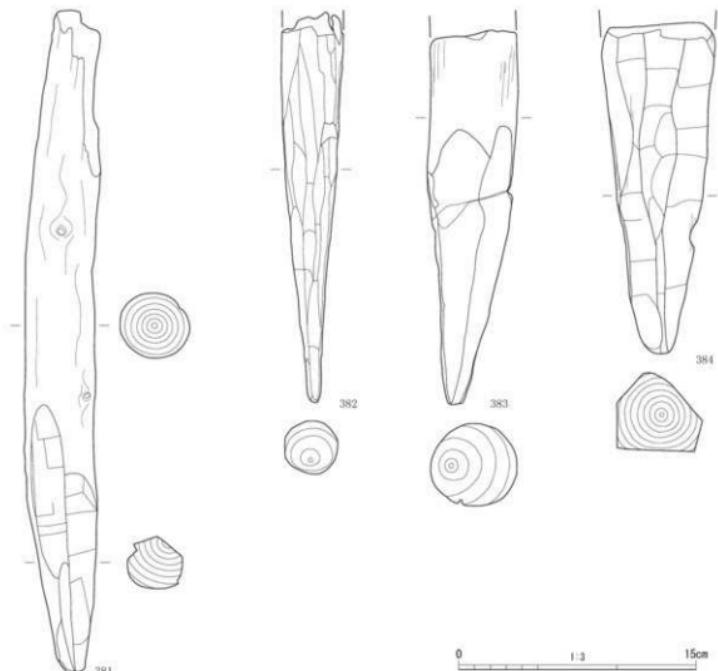


Fig. 109 VII層 出土遺物 (30)

平な有頭。379は完存する。380は留針か。391は片側の端部を鉤先のように加工している。392は両端を細く加工していることから織機の可能性も考えられる。370・375・376・388はすべて部材。376はホゾ穴のような加工がある。378は先端部が炭化している。388は長さ52.3cmの部材。1箇所に浅い抉りと径0.6～0.8cm程の穿孔がある。端部の太い方に緩やかに湾曲する。

(5) 小結

VII層の遺物は大溝の底面及び底面付近から大量に出土した。種類も多く土器、木製品、石器、金属器、玉類等も出土している。大溝の上流に位置する梶子遺跡13次調査や下流に位置する鳥居松遺跡5次調査においても同様な状況が確認されている。本調査では、この時期の遺物は概ね古墳時代後期（6世紀中葉～7世紀）であり、VII層堆積の開始時期について再認識できたことは大きい。

VII層は水流により下層のVIII層を破壊し大溝の底面を形成したと考えられる。鳥居松遺跡5次調査では溝の底面より川底溝が確認され、19次調査では底面に大きな窪みを5箇所確認している。砂が多く含まれる層を堆積することから、水量は豊富で激しい水流であったと推定され、洪水等の周囲への影響も窺える。またVII層以前の枝溝であるSD314を検出したことも大きな成果であった。

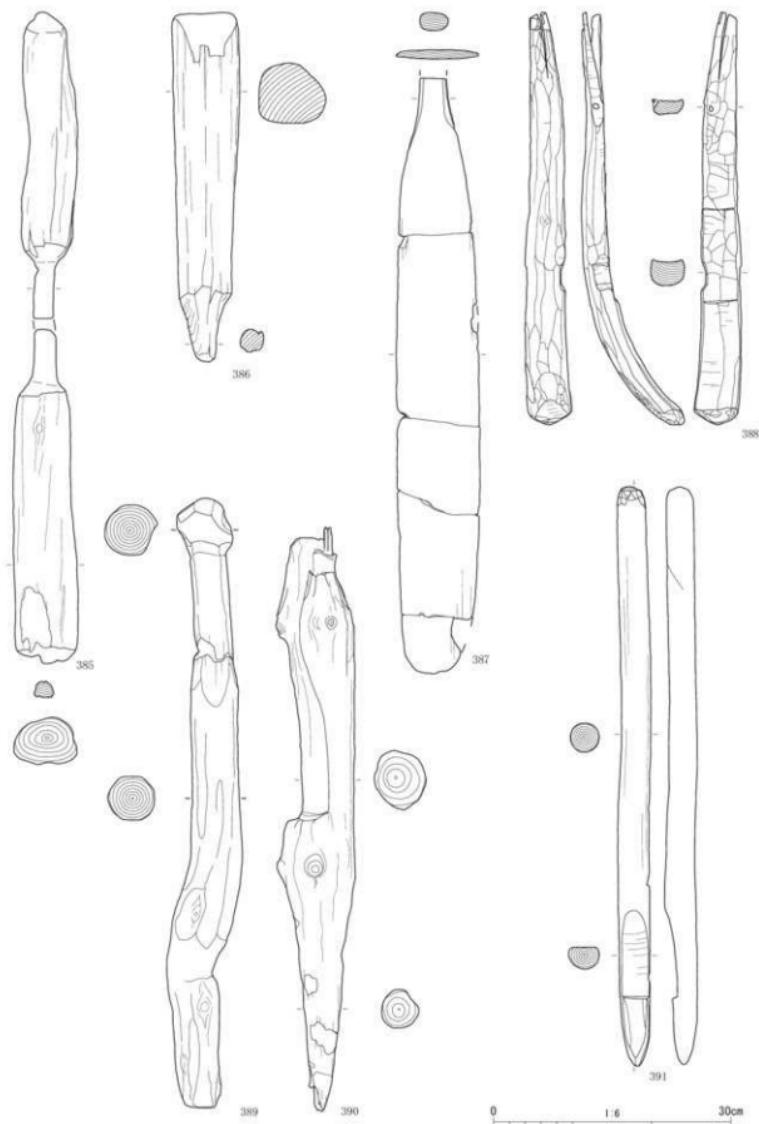


Fig. 110 VII層 出土遺物 (31)

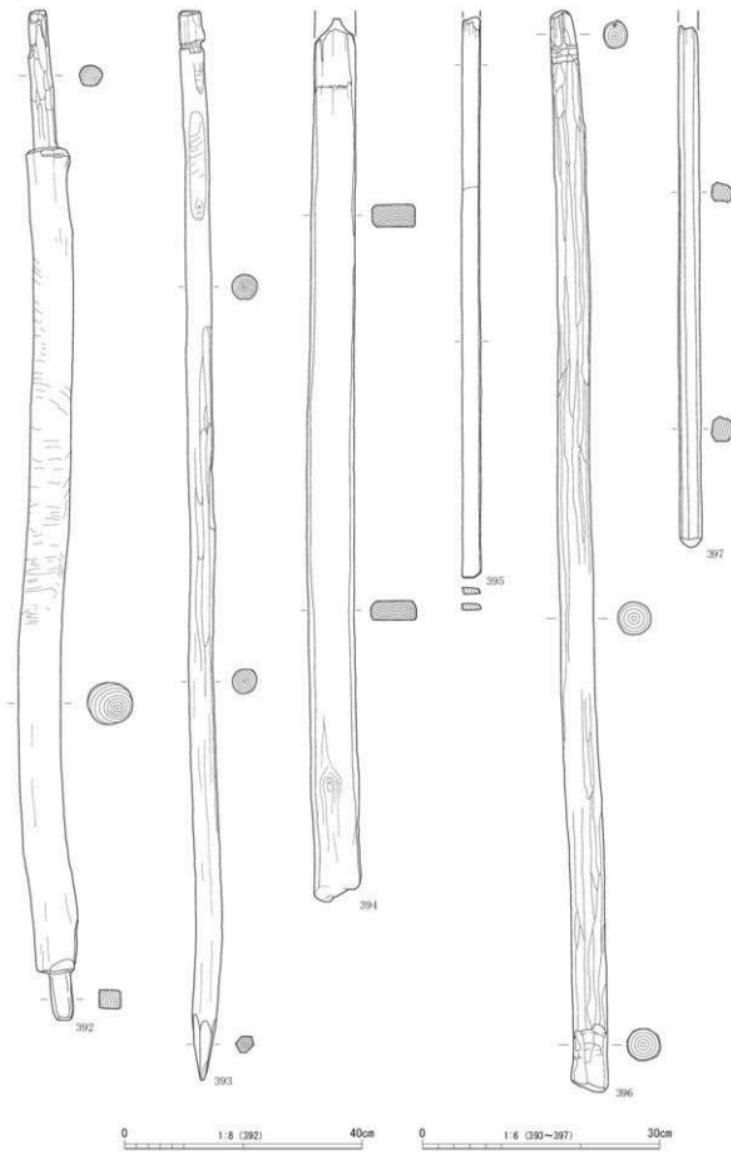


Fig. 111 VII層 出土遺物 (32)

5 伊場大溝V層の調査

(1) 概要

V層は、褐色、灰色シルトを基本とする層位で奈良時代（8世紀前葉～中葉）に堆積した層である。上層のIV層と比較して植物遺体を含む割合が多いが堆積土は類似しているためIV層との識別は出土遺物の時期や溝底の標高などを踏まえて分層した。

VII層と比較すると、埋没により構幅が狭くなり深度が浅くなる。大溝に関連する遺構として貝塚5箇所、護岸状遺構1箇所、枝溝1条を確認した。検出された遺構は大溝の南岸から底面付近に集中する傾向がみられ、急傾斜の北岸では確認されず、VII層やIV層でも同様な状況がみられる。護岸状遺構（SX03）は土留と考えられる木製構造物で、直下に貝塚（SS11）の形成が確認される。

過去の伊場大溝の調査では、木簡や墨書き土器など敷智郡家閨連遺物が多数出土しているが本調査でも同様、木簡や墨書き土器などの文字資料の他に絵馬や畜串、舟形などの木製祭祀具が出土している。特に木簡は8点出土しており、うち梶子28号木簡は「天平十六」とあり、年号と考えられる記述がなされている。なお、遺物の出土傾向を検討するため大溝を北西部、南東部の2箇所に分け遺物を示す。

(2) 伊場大溝の形状

V層の大溝は、幅13.6m、最深部は標高-1.4m程で遺構検出面からの深さは1.80mである。流路はほぼ直線的に伸びるが、南東側で僅かに西側に湾曲する。底面は落ち込みを有するVII層と異なり、ほぼ平坦となる。大溝の北岸は等高線が密で急傾斜となる。南岸は調査区北東側や中央部付近の一部で急傾斜となるが、北岸と比較するとやや緩やかな傾斜となる。伊場遺跡の調査にて確認されたV層とVII層を分層する砂層であるVI層は、本調査では確認できなかった。V層内に植物遺体が多く含まれていることから大溝内を流れる水量が減少、または穏やかになった結果、植物が繁茂していた環境であったと推定される。

(3) 遺物の出土状態

遺物出土の傾向 V層における遺物の出土状態は、大溝南岸にやや集中する傾向がみられる。ただし、北岸部においても遺物が多く出土する地点が確認される。VII層では水量が多く、岸辺に廃棄された遺物が大溝の底に遺物が集中するのに対して、V層では前述のとおり水の流れが穏やかため、岸辺に廃棄した遺物が流されずに停滞して比較的の岸辺に近い場所に集中する出土状態となったと推測される。VII層と比較すると木製品の出土量が増加傾向にある。

土器 V層では比較的の岸辺に遺物が集中し、やや南岸に偏る。1箇所に遺物が集積する出土状態は確認されていないが、貝塚内またはその周囲に遺物が出土することから貝類とともに土器などを廃棄していたと考えられる。本調査では貝塚内含め製塙土器が多数出土している。また、過去の調査では墨書き土器が多く出土しているが、本調査でも大溝南東部を中心で多数出土している。墨書き土器など郡家に関連する遺物が出土していることから近隣に敷智郡家に関連する施設等が存在してい

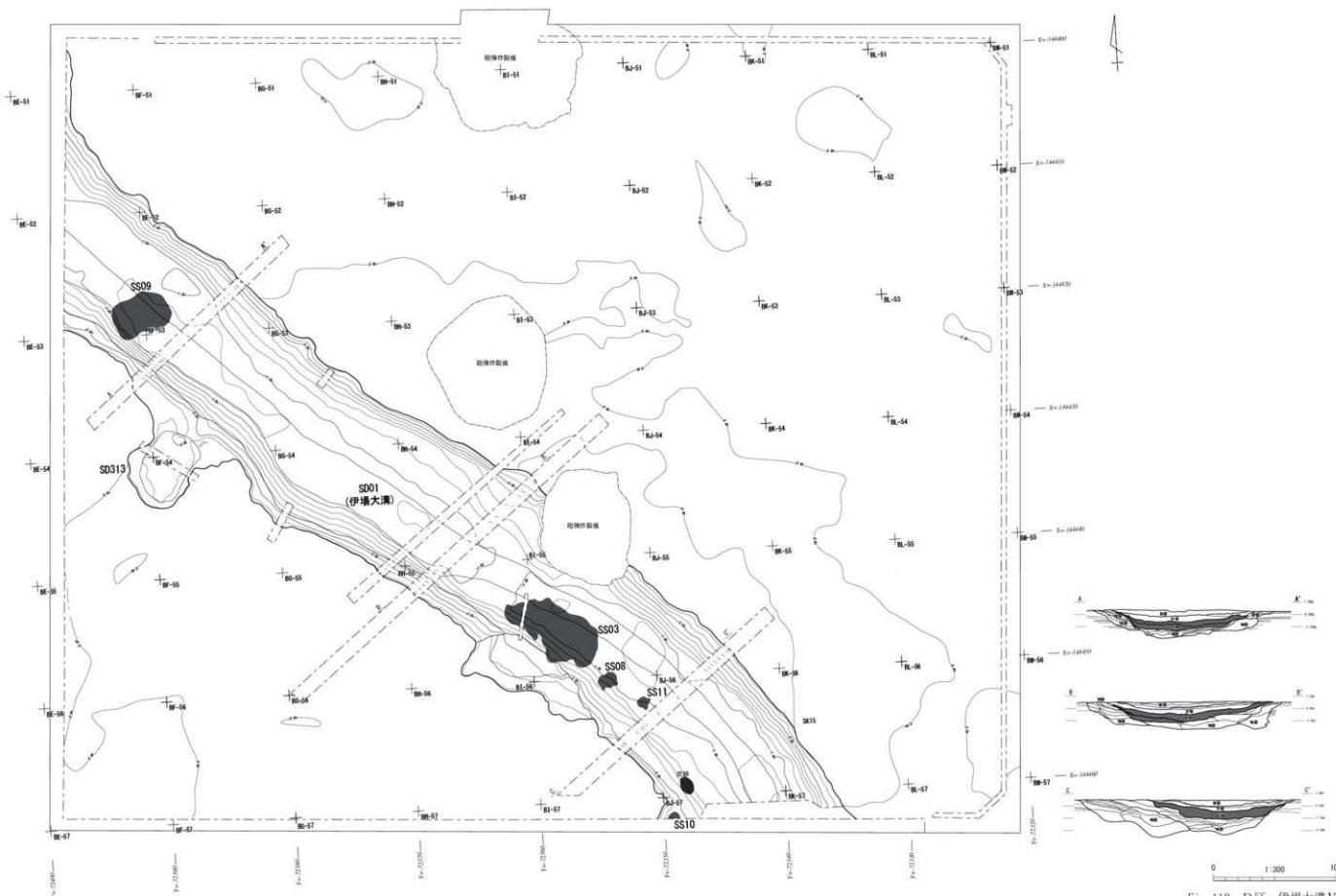


Fig. 112 D区 伊場大溝V層

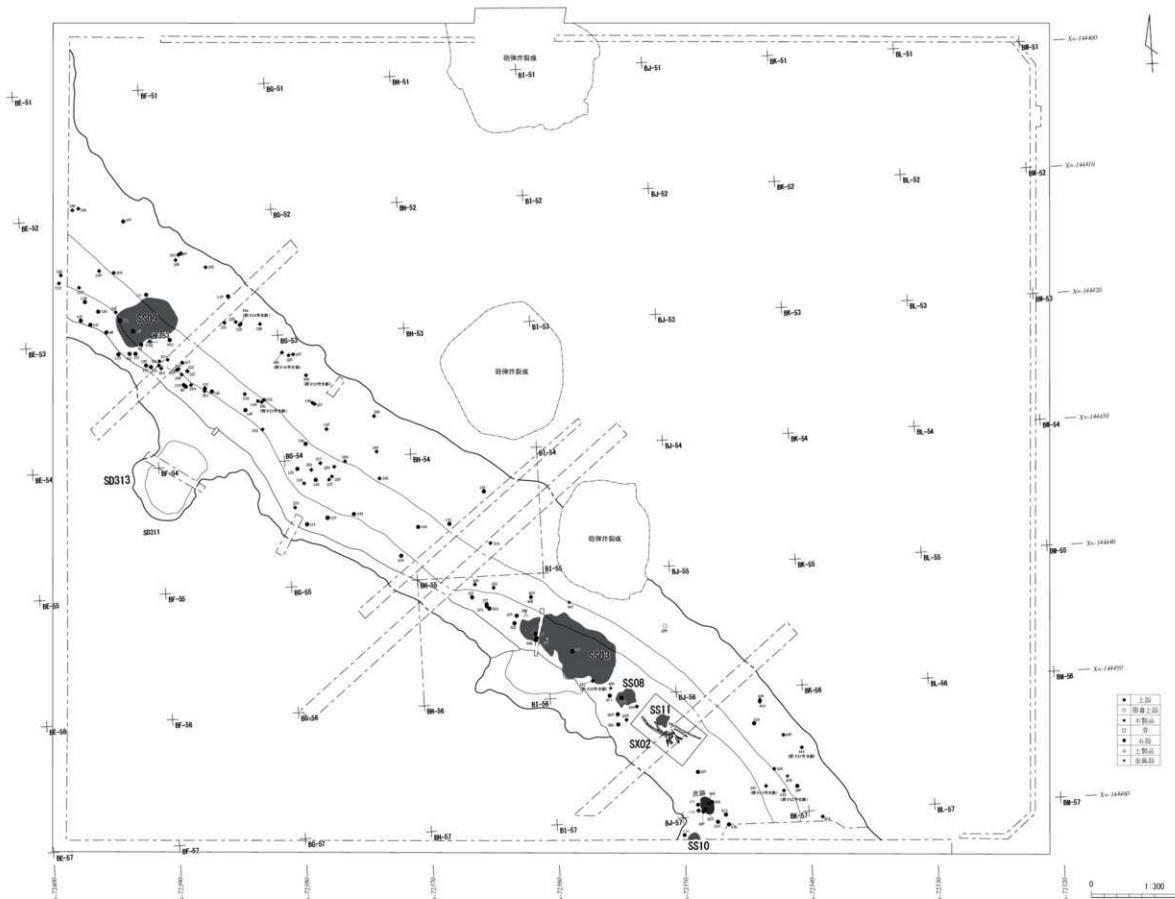


Fig. 113 D区 V層における遺物出土位置

たと考えられる。

木製品 土器とほぼ同じ出土状態が確認される。流されやすい木製品がこのような出土状態であることは、大溝内の水流が穏やかで比較的流れにくい環境下であったことがうかがえる。出土遺物は、用途不明の組み物や大型曲物の底板、鋤や鎌、馬鍬などの農具、織物関連の道具と考えられる木錘、Y字形木製品など多数出土している。他にも絵馬や舟形、畜串、人形など祭祀関連の遺物が多数出土しており、特に人形（197）は上部に人面が墨書きされている。

木簡 本調査ではV層から木簡8点が多数出土しており、伊場大溝内で2箇所やまとまつた出土状態を示す。北西部から4点（梶子26号木簡・192、28～30号木簡・193～195）、南東部から4点（梶子23号木簡・412、25号木簡・413、27号木簡・414、31号木簡・415）出土している。出土位置は北西部、南西部とともにやまとまる傾向が確認される。特記すべき事項として梶子28号木簡（193）が挙げられる。28号木簡は「天平十六」と明記されており、年号の可能性がある。天平十六年（744年）とすればV層の堆積した年代と一致する。

その他の遺物 土製品では陶質の土馬（399）が南岸より出土している。その他に革袋形土製品が出土している。金属製品では刀子や鎌、鉄鎌の一部が出土している。中でも刀子は多数出土しており、殆どが貝塚内やその付近に集中する。石製品は、砾石や圓石が出土している。

(4) 護岸状遺構

SX03 (Fig. 114) 伊場大溝南東部の南岸に大型の木材と杭が出土した。その直下に貝塚（SS11）

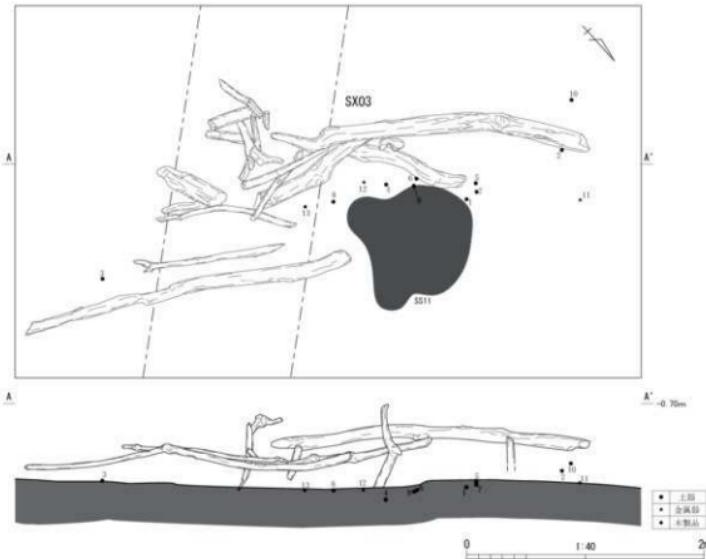


Fig. 114 SX03 実測図

5. 伊場大溝V層の調査

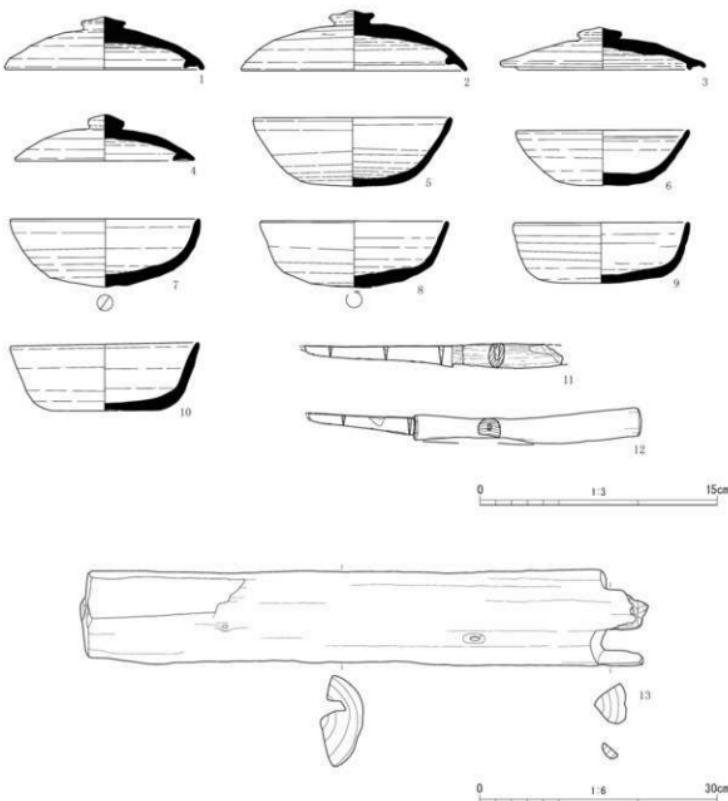


Fig. 115 SX03 出土遺物

が検出されている。

横木の殆どは、加工のなされていない芯持ち丸木材で伊場大溝に対して平行に置かれている。杭は横木に対して大溝底部側に打ち込まれており全体の構造をみると土留による護岸施設と考えられる。南側に位置する横木はやや下流へ流されている出土状況を示す。SX03 北側の直下に SS03 が確認されることから護岸状構造から大溝内へ貝などを投棄していたと考えられる。

1～10 は SX03 より出土した須恵器である。1～4 は返り蓋、5～10 は無台碗である。出土した標高がやや低いこと、遺物の特徴から VII 層に帰属する遺物となる。7 の底部にはヘラ記号が記されている。11・12 は鉄製の刀子であり、両方ともに柄が残存する。13 は建築材と考えられる木製品で、木製構造物に近い位置で出土していることから二次転用され構造材の一部であった可能性が

高い。

(5) 貝塚

SS03 (Fig. 116・147～119) 伊場大溝中央部やや南側の南岸斜面から底部付近に位置する。検出された規模は長軸 8.33 m、短軸 4.44 m である。貝層の厚さは最も厚い部分で 0.86 m であり、多量の貝が廃棄されている。貝の組成はヤマトシジミが多数を占めており、ダンベイキサゴも割合は高い。アサリ・ハマグリも少量確認される。

SS03 では須恵器や土師器、木製品、金属製品、石製品など多数出土している。

14～48 は須恵器であり摘蓋、有台坏身、無台坏身、無台碗、壺類、甕が出土している。14～21 は摘蓋である。21 は内面に墨書が記されているが欠損により判読はできなかった。22～32 は有台坏身である。そのうち 23 は底部が高台より突出した形状である。出土した有台坏身は全体的に底部から口縁部にかけて屈曲する形状であるが、22・29～32 の屈曲は特に鋭角であり、32 は他と比較して高台が高い。22 は底部に 1 文字墨書が記されているが、欠損により判読はできなかった。33～35 は無台坏身で口縁部がやや外反する形状である。36～44 は無台碗である。44 は底部に墨痕が認められる。

45 は長頸壺の口縁部から頸部である。46 は短頸壺で、外面体部に沈線が施されている。47 は広口壺の口縁部である。48 は甕で体部下半が欠損しており、外面は緻密な並行タタキで調整されている。体部下半は別方向のタタキ調整されており、内面上半は同心円状の當て具痕が確認される。下半はハケ・指ナデが施される。

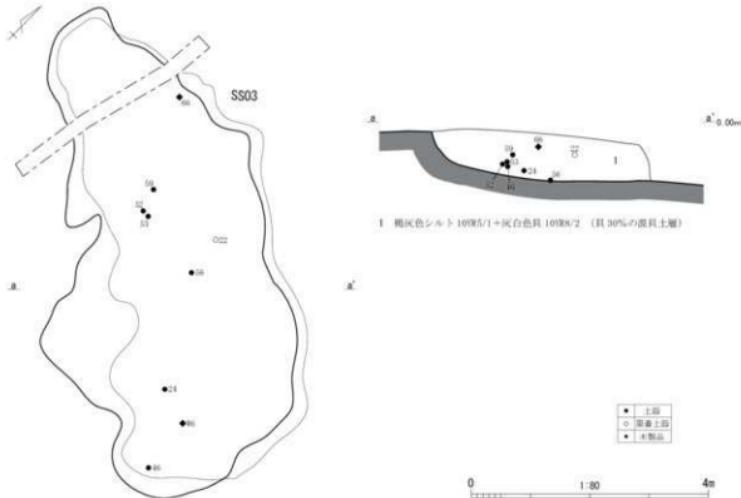


Fig. 116 SS03 実測図

5 伊場大溝V層の調査

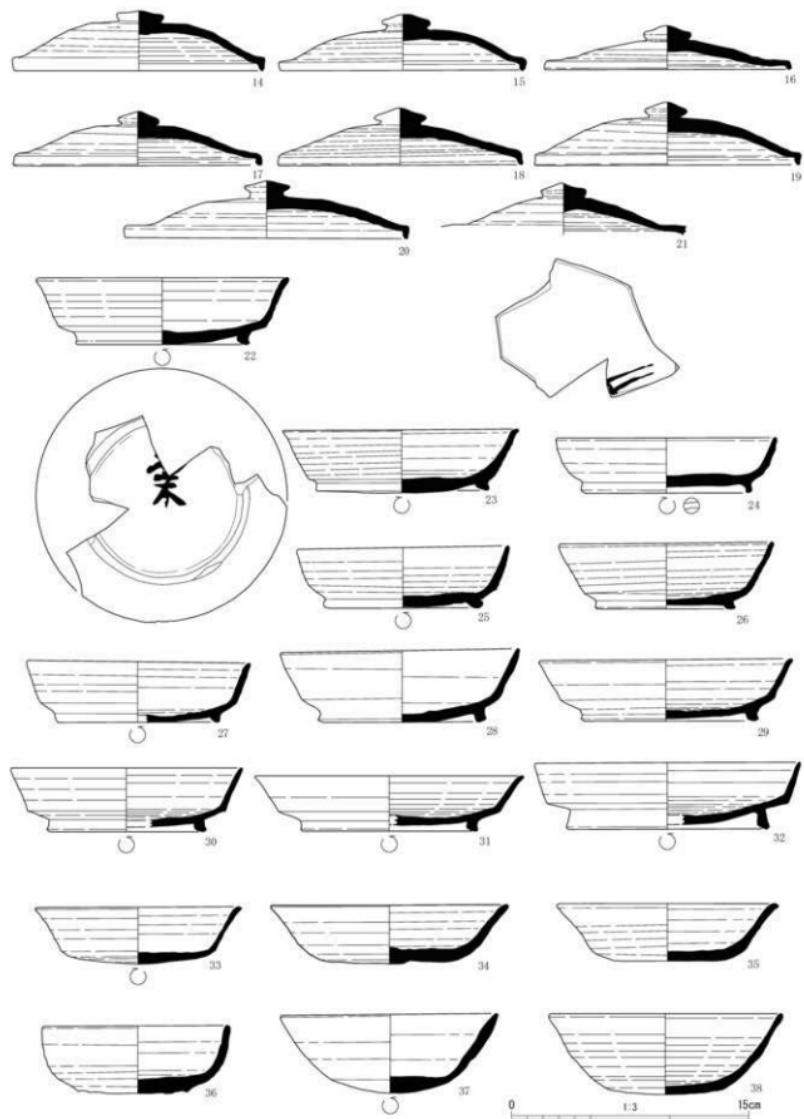


Fig. 117 SS03 出土遺物 (1)

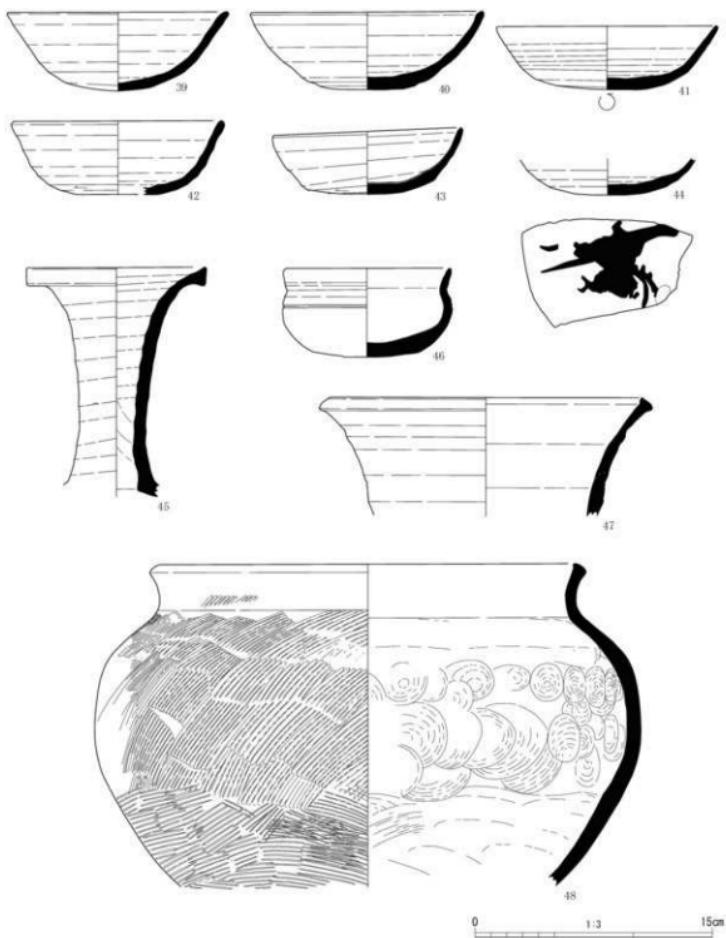


Fig. 118 SS03 出土遺物 (2)

49～63は土師器である。51・52は壺で51は内面に赤彩されている。52は外面に丁寧なミガキ調整が施され、内面は暗文が認められる。49・50は皿類で、49は内外面ともに赤彩されている。外面は丁寧なミガキ調整が施され、内面は暗文が認められる。50は台付皿である。外面は摩滅により不明瞭であるが、内面は暗文が認められる。

53・54は甕で53は体部から口縁部で内外面ともにハケメ調整が施される。54は台付甕の脚部で

5. 伊場大溝V層の調査

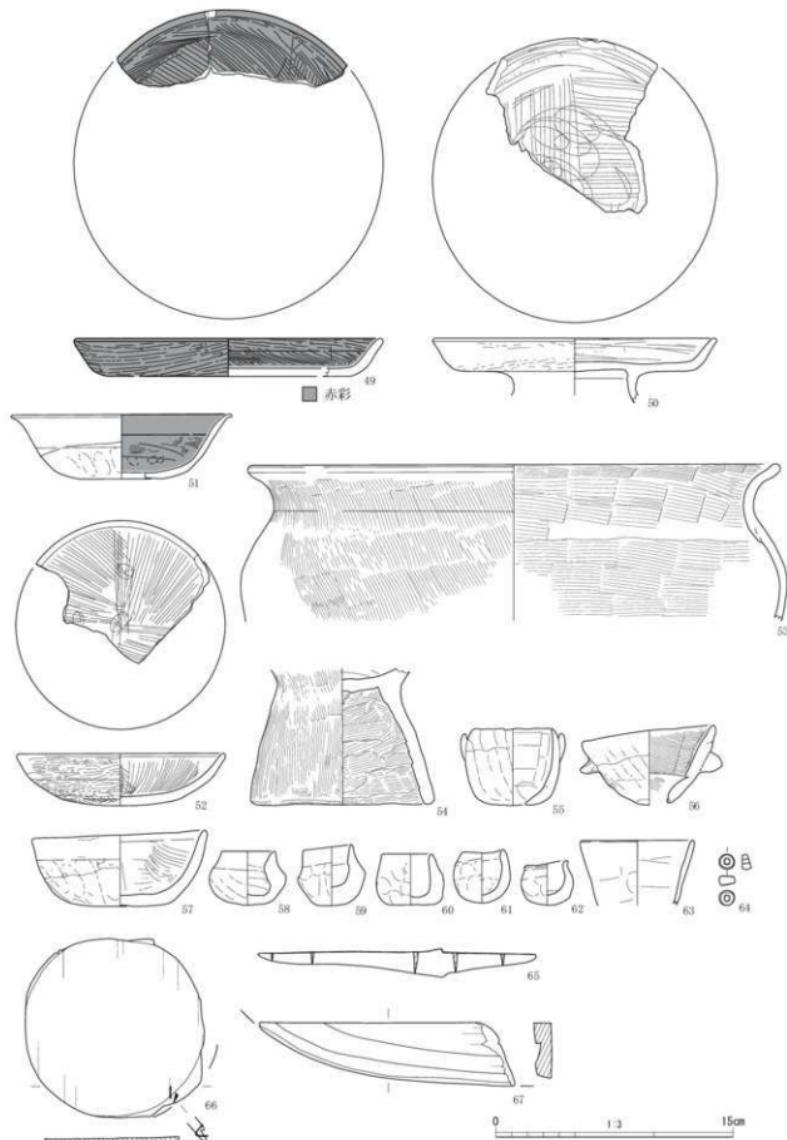


Fig. 119 SS03 出土遺物 (3)

ある。55～62は小型模倣品である。55・56は瓶の模造品であり、55はやや碗形の形状である。57は碗、58～62は壺の模造品である。63は製塙土器である。

石製品は64の1点が出土している。64は滑石製の白玉である。金属製品は65の1点が出土している。65は刀子であり、使用により刃部が薄くなっている。

木製品は66・67の2点が出土している。66・67とともに曲物の底板であり、67は破片であるが形状は梢円形と考えられる。

SS08 (Fig. 120・121) 伊場大溝中央部よりやや南側のSS03とSS11の間で検出されている。検出された規模

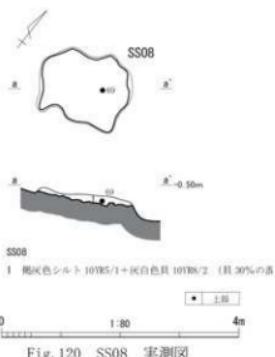


Fig. 120 SS08 実測図

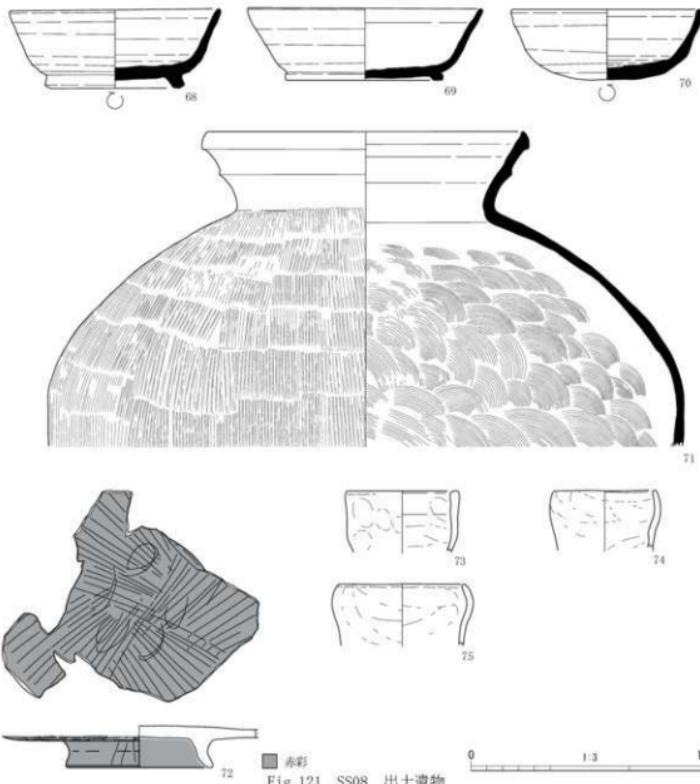


Fig. 121 SS08 出土遺物

5. 伊場大溝V層の調査

は長軸 1.62 m、短軸 1.46 m である。貝層の厚さは最も厚い部分で 0.17 m である。貝の組成はダントンベイキサゴが最も多く、次いでヤマトシジミ、ハマグリ、アサリ、クロダカワニナとなる。

遺物は須恵器、土師器が出土している。68～71 は SS08 より出土した須恵器である。68・69 は有台坏身、70 は無台碗である。71 は甕で体部下半は欠損している。外面は縦方向に緻密な平行タタキで調整されており、内面は青海波状の當て具痕が確認される。

72～75 は土師器である。72 は台付皿で内外面ともに赤彩が施されている。内面には暗文が確認される。73～75 は製塙土器で内面はナデ調整が確認される。

SS09 (Fig. 122・123) 伊場大溝北西部の南岸から底部に位置する。検出された規模は長軸 4.64 m、短軸 3.73 m である。貝層の厚さは最も厚い部分で 0.32 m である。V 層では唯一、大溝の北側から検出された貝塚である。他の貝塚より貝の混入率が高い。

遺物は須恵器、土師器、金属製品、木製品が出土している。須恵器は摘蓋、壺が出土している。76 は摘蓋で擴部はやや扁平な形状である。77 は頭部から口縁部が欠損している壺である。欠損のため器種は不明瞭であるが体部の形状から長頸壺と考えられる。78～80 土師器である。78 は壺で内外面ともに丁寧なミガキ調整を施されている。79・80 は製塙土器で内面はナデ調整が施されている。

金属製品は 1 点出土している。81 は鉄製の刀子で茎部は欠損している。木製品は 1 点出土している。82 は鍼の未加工材と考えられる。

SS10 (Fig. 124) 伊場大溝南部の南岸に位置する。検出された規模は長軸 0.99 m、短軸 0.64 m であるが調査区外へ延びるため正確な規模は不明である。貝層の厚さは最も厚い部分で 0.14 m である。

SS11 (Fig. 124・125) 伊場大溝南部の南岸に位置する。検出された規模は長軸 1.12 m、短軸 1.09 m である。貝層の厚さは最も厚い部分で 0.19 m である。近接して護岸状構造と考えられる SX03 が検出されており、SX03 との貝などの投棄に関する関連性が伺える。

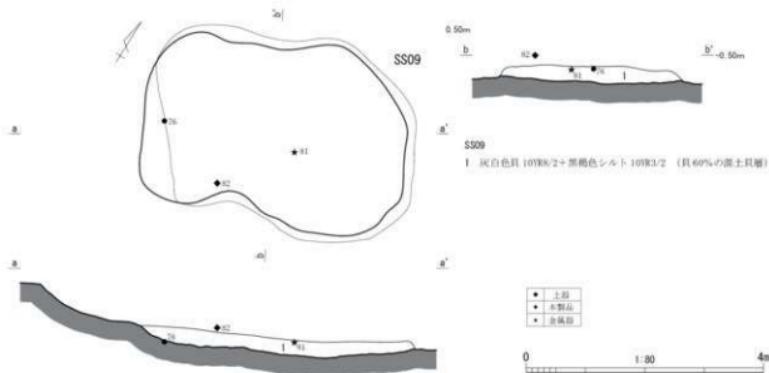


Fig. 122 SS09 実測図

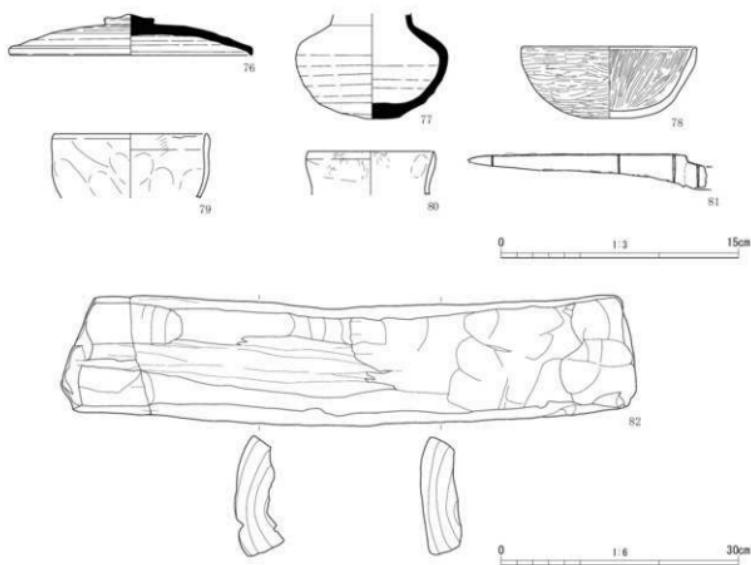


Fig. 123 SS09 出土遺物

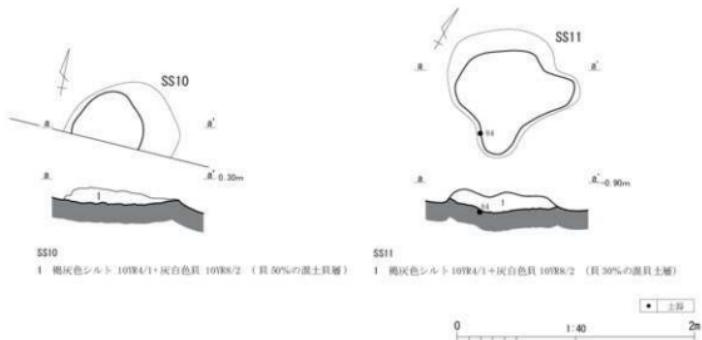


Fig. 124 SS10・SS11 実測図



Fig. 125 SS11 出土遺物

5. 伊場大溝V層の調査

SS11では須恵器が2点出土している。83は坏身で、特徴からV層の混入品と考えられる。84は無台碗で、V層で出土する無台碗と同じ特徴を示す。

(6) 枝溝

SD313 (Fig. 126) 伊場大溝北西部の南岸に合流する枝溝である。IV層に帰属するSD311に切られる。また、V層に帰属するSD315と位置関係が重複する。伊場大溝から袋状に張り出す形状をしており、全長は6.56mである。層厚は0.32mとやや深度は浅い。位置関係の重複、堆積層などSD315と類似するため、SD315上層の一部である可能性があるが、検出状況を踏まえ別構造とした。遺物は出土していない。

(7) V層出土遺物

概要 V層全体の出土量は、VII層と比較するとほぼ変わらない。ただし、V層では土器が減少しているのに対し、木製品は増加している。前述したとおり、V層では大溝内での流れが減少、停滞していたために木製品が流されにくい環境であったため、出土量が増加したと推定される。土器では、須恵器、土師器が出土しており、須恵器は土器全体の6割近くを占める。木製品は、祭祀貝、農具が多数出土しており、木簡は8点出土している。また、絵馬が1点出土している。

なお、BI54・BH55ラインで遺物出土位置を分け、伊場大溝の北西部、南東部について遺物出土

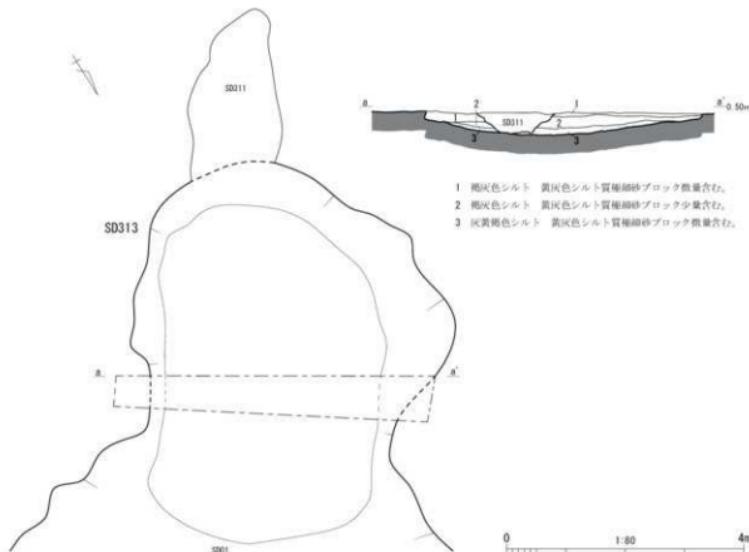


Fig. 126 SD313 実測図

に差異がみられるか検討を行ったため、図版も北西部・南東部と分けて示した。

①V層北西部 (Fig. 127 ~ 146)

須恵器 (Fig. 127 ~ 130) 85 ~ 148はV層北西部より出土した須恵器である。器種は、坏蓋や坏身が主体的であるが高坏や壺類、甕、甕などが出土している。そのうち、墨書土器が1点出土している。

85は無台坏身で側面に墨書で「吉」と記されている。86 ~ 107には坏蓋と坏身を示した。坏蓋は摘蓋、坏身は有台坏身が主体的である。86 ~ 89の坏蓋、坏身は7世紀代の特徴を示すことからV層からの混入品と考えられる。うち88・89の坏身底部にはヘラ記号が記されている。90 ~ 96は摘蓋である。91のみ体部が宝珠型ではなく扁平で、口縁の折返し部も弱い。97 ~ 107は有台坏身である。97 ~ 100は底部が高台より突出した形状であり、101 ~ 107は底部が突出しない形状の有台坏身である。106のみ体部が鋭角に屈曲する形状である。107は有台坏身の底部外面を使用した転用硯である。外面底部には全面に墨痕が確認される。体部全周に渡って意図的に丁寧に打ち欠き整形がなされている。ある程度長期に渡って硯として使用されていた可能性がある。

108 ~ 119は無台甕である。108 ~ 113は底部が丸みを帯びている。114 ~ 119は底部が扁平で体部がやや屈曲して立ち上がる形状である。120は皿である。底部が欠損しているが、口縁部の先端が外反する。121 ~ 128は高坏である。121・122は形状からV層からの混入品と考えられる。129 ~ 134は壺蓋である。129は摘部が扁平の形状である。134は短頸壺の蓋とみられ摘部が宝珠型で口縁部が外反する形状である。

135 ~ 141は壺類である。壺類では、広口壺、長頸壺、短頸壺が確認される。135・136は広口壺で肩部はなだらかな形状である。135の底部にヘラ記号が記されている。137 ~ 139は長頸壺である。137は体部から口縁部、138は体部、139は体部下半が残存している。139は有台の長頸壺と考えられる。140・141は短頸壺である。140は小型で頸部の括れが弱く肩部は浅い凹みが全周する。

142は平瓶である。外面体部上半に3条の沈線が施されている。143 ~ 147は甕である。143と144は有台甕ではあるが底部が高台より大きく突出した形状である。145・146は肩部が屈曲する形状である。148は甕の肩部から口縁部にかけて残存している。外面体部はタタキ調整が施されている。

土師器 (Fig. 131 ~ 134) 149 ~ 184はV層北西部より出土した土師器を示した。坏や皿、壺、甕、手捏ねの碗や鉢、製塩土器が出土している。また、人面墨画と考えられる墨画が描かれている碗が確認される。

149・150は坏で、ともに内面に暗文が確認される。150には外面にミガキ調整が施されており、内外面ともに赤彩が確認される。151 ~ 156は内外面ともに赤彩が施されている皿である。154 ~ 156は内面に丁寧なミガキ調整がなされており、内面に暗文が施されている。154・155の暗文は内面を中心に放射状に広がり、中心や外側に円形を一筆書きで連続して描かれている。156は縱方向と斜線の暗文が描かれている。

157・158は外反口縁壺である。158は頸部がやや垂直に立ち上がり外反する。159・160は台付甕である。161 ~ 164は甕である。161は長胴甕と考えられ、形状の特徴からV層の混入品とみられる。